
ネギま！剣製の凱歌・新編

佐藤 C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 剣製の凱歌・新編

【Nコード】

N1533W

【作者名】

佐藤C

【あらすじ】

現在、同作者が連載中の「ネギま！―剣製の凱歌―」の改訂版。魔法先生ネギま！とFate/stay nightのクロスオーバーで、ネギま！世界出身の「衛宮士郎」が主人公。オリキヤラ・オリジナルストーリーが入りますが基本的に原作沿い。ルビが多いのでPCからの閲覧をお薦めします。基本的に改訂以前版を優先するので今作品の更新は不定期です。

設定1 士郎のステータス（前書き）

初めての読者様はじめまして、

「ネギま！―剣製の凱歌―」の読者様こんにちは。

佐藤Sと申します。

以前から書くと言っておりました剣製の凱歌・改訂版、満を持しての投稿です。

だというのに最初は設定話となりましたが、面倒だという方は過去編から読み始められても構いません。

内容についても、基本的には「直したい部分だけ直した」のがこの改訂版なので、改訂以前とまったく変わっていないような話を投稿することもあります。なにとぞ大目に見てくださるとありがたいです。

設定1 士郎のステータス

主人公…衛宮士郎

名前と一部の設定以外は完全にオリ主。ネギま！世界出身の魔法使いで魔術師。

・誕生日…1984年4月6日。原作開始時18歳、2003年4月6日で19歳

・身長185cm、体重74kg（魔法世界編の頃には身長186cm、体重76kgになる）

・魔力量…木乃香の3／5程度（原作開始時）↓後に木乃香の3倍程度になる（予定）

8歳で実の家族と死別し、「弱い自分」に嫌悪を抱くようになる。だが自分のような凡人に何か出来るはずもないと、一般人として普通に生きてきた。しかし12歳のクリスマスに、後にマスターとなるエヴァンジェリンと魔法を目撃し、「魔法があれば強くなれる」との思いを抱いて魔法使いを志す。

その数年後に友人を殺され、自らも臨死体験する。そのとき平行世界の自分と魂が同期し「固有結界」を通して魔術を会得した。そして友人の死により再び自分の無力さを痛感した士郎は「自分には価値がない」という考えを無意識に抱くようになり、自分より他人を優先するようになる。結果「まさか自分なんか」という考えか

ら、他人からの期待・信頼・好意に対して異常に鈍感になっている。しかしその異常な感性は現在、エヴァンジェリンによって矯正されつつあるらしい。

「千の刃」ジャック・ラカンに師事し、魔法界では「無限の剣」グラディウス・インフイニトゥスという異名を執る。他にも「千の刃の弟子」「コピー魔法使い」などがある。トレース・マギステース

木乃香やネギ達が何かに巻き込まれた際には基本的に自ら戦うことはせず、当事者達に任せようとするが、荷が重いと判断すれば自らも力を揮うというスタンスをとる。

「大切なだれかを守るだけの力が欲しいという理想を実現してしまった人物」。

《外見》

…赤髪紅眼。Fate原作の士郎よりはナギやネギの髪に近い色。髪型は原作士郎と同じ。だが一時はアーチャーの髪にランサーの前髪を足したような髪型（イメージとしては、Fateルートでカリバーンを投影したときの士郎みたいな感じ）だった。

髪型が変わったのは、2001年に麻帆良に帰って来たときに「士郎らしくない」と言う木乃香に無理やり昔の髪形に戻されたため。

…整っているとも言える精悍な顔立ち。見る人によって普通ともイケメンともとれるが、2-A（3-A）女子達からはイケメン評価を受けている。

…服装・身嗜みには頓着しないが、黒・赤系統色の服を好む。この

小説でのデフォルトはワインレッドの長袖Tシャツと黒いズボン。
料理時はそこに黒いエプロンを装備する。

《魔法》

魔法学校を僅か2年で中退しているが、魔法世界での修行生活で
何とか魔法学校卒業程度の魔法は使える。ただし精度は平凡。

普通の魔法はあまり使わない（使えないのではなく）。得意属性
は火。本人は知らないが父親譲りで重力魔法と時間魔法の適正があ
る。

《技法》

..気、瞬動、虚空瞬動を使用可能。

《固有技法》

..魔術

・解析、強化、投影、固有結界を主に使用するが、通常の魔術もあ
る程度使える。

*ネギま！世界出身の士郎が魔術をえるのには一応理由がありま
す。

*士郎は剣製の質でアーチャーに及ばない。

..オリジナル魔法

・魔術とネギまの魔法をブレンドした技術や、士郎自ら開発した新
呪文など。

《スキル》

・直感…A～E

「そんな気がする」という程度のものから虫の知らせ、未来予知レベルのものなど、精度が定まらない不安定な直感^{ランダム}。

・心眼（真）…B

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。経験に裏打ちされた戦闘論理。僅かな勝率が存在すればそれを生かすための機会を手繰り寄せる事ができる。

・千里眼…C

純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

（士郎は幽霊を見ることが出来ない。これは千里眼のランク云々ではなく士郎本人に靈感が皆無なため。この所為で士郎はさよを見ることができない）

・道具作成…B

魔力を帯びた道具を作成できる。このランクで開発できる道具は一級の性能を持つ。さらに高い同技能は、疑似的な不死を可能にする薬を作ることでもあるという。

《戦闘時の装備》

アーティファクトに登録されているいくつかの服装を纏う。

？赤い外套（AF初期設定）

？赤い革のジャケット、黒いブーツ（AF初期設定）

？黒いズボン、黒いロングブーツ、フード付きの黒いコート。

《パクティオーカード》

仮契約カード：従者のカード（Charta Ministerialis）

契約主…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

数字…999（CMXXIX）

色調…虹色（prisma）

称号…無限の剣を持つ者（GLADIUS INFINITUS）
グラディウス インフイニトゥス

徳性…正義（justitia）

方位…東（orients）

星辰性…黒い穴（nigrum foramen）

アーティファクト…「顔のない英雄」
ホ・ヘーダネ・デンティムトビズン

AFの外見…

「赤錆びた鉄甲」ガントレット。ガントレットとは言うが装甲付きの手袋のような形状をしている。布部分は朱色の生地で、金属部分が赤く錆びた鉄の手甲。

「顔のない英雄」の能力…

・登録した他人のアーティファクトの形状と能力を完全再現する。

・登録できる数は4つ。

・登録したいアーティファクトのカードと自分のカードを重ねて「登録」ミニと唱えれば登録完了。

・この能力で現れるアーティファクトはあくまで「顔のない英雄」が変化したもので、オリジナルのアーティファクトの状態には発動を左右されない。よって使用に制限はない。

・この能力を使えば同じ場所、同じ時間に同じアーティファクトが存在できる。

※この仮契約に関して、エヴァと士郎がキスしたかどうかは明言し

ませんw

あくまで「キスが一番お手軽」な方法なのであって、それしか契約方法がないわけではありませんので。

士郎曰く「何か知らないうちに契約が終わってた」らしい。

《終わり》

- ・オリジナル魔法の設定などは随時投稿していきたいと思います。
- ・そしてストーリーが進むと士郎がパワーアップする予定です。その際も新たな設定話を投稿したいと思います。

お楽しみに！

……飽きずに更新が続けばの話ですが！！

設定1 士郎のステータス（後書き）

（補足・解説）

..「ホ・ヒーローズ・メター・デン・アンティムトピズン」

||「O ? ρωα? με τα Δε ν α ν τ ι μ ε τ ω π ?
ζ ο υ ν .」

||「無い顔を持つ英雄」

「顔のない英雄」は本来なら「ホ・ヒーローズ・アプロソツポス」となるのですが、「無い顔を持つ英雄」——つまり「顔のない顔を持つ英雄」という意味の名前の方が士郎の性質に合っているかなと思ったので。

なんせ「無銘」ですから（F a t e／EXTRA）。

それでは次回！！

設定2 士郎の半生

《年代とその当時の士郎の居場所・拠点》

1992―京都（8歳）
1993―京都
1994―京都
1995―麻帆良
1996―麻帆良
1997―ウェールズ
1998―ウェールズ
1999―魔法世界
2000―魔法世界
2001―麻帆良
2002―麻帆良
2003―麻帆良（18歳時に原作開始、誕生日で19歳に）

《経歴》

1984／4／6―士郎、衛宮家に生まれる。

1992―士郎8歳。アメリカでテロに遭い家族を失う。母方の祖父がいたが彼の元ではなく父の親類であった近衛家に引き取られ「近衛士郎」となる。義妹・木乃香と共に麻帆良を訪れるまで学校には通わなかった。

1995／4／8。――士郎11歳、木乃香7歳。2人は京都を離れ麻帆良本校初等部に入学。

（ただし木乃香は13歳から女子中等部に編入）

1996／12／25。――士郎12歳。魔法使いを目撃する。彼女の会話から祖父・近右衛門が関わっていると知り祖父に魔法の教授を頼みこむ。

1997／9月。――士郎13歳。近右衛門、何故か自ら魔法を教えることも麻帆良で教えることもせず英国ウェールズのメルディアナ魔法学校へ士郎を入学させる（初等部卒業後、半年かけて英語を必死に習得）。13という遅い年齢での入学となった。

1998／12／25。――士郎14歳。英国で事件に遭遇して臨死体験する。魔術を会得する。

1998／4月。――士郎14歳。独自に情報を入手し、メルディアナを無断で中退して「目的」を果たすべく魔法世界へ不法入国する。そこで己の師匠となる人物と邂逅し、以後約2年間修行に励む。その後目的を果たすことに成功する。

2000／9。――士郎16歳。気まぐれに麻帆良を訪れる。そこで昔見た魔法使いと出会い、彼女の従者になるべく押し掛ける。結果「従者候補その1」として居候することになる。さらにその後、これ以上近衛家に甘えるわけにはいかないと考えて籍を抜き、名前が「衛宮士郎」に戻る。

2003／2月。――士郎18歳。ネギ・スプリングフィールドが

麻帆良を訪れる。

2003／4／6。——士郎19歳。

＊実にハードスケジュール。読者の皆様、波瀾万丈ということにしておいてください。

しかしこれを表社会の方面からのみ見たら、士郎の最終学歴が「小卒」になるな……メルディアナも中退だし……。

……………ごめん、士郎。

設定3 世界観設定

《この小説におけるFate世界とネギま世界の関係》

この小説での「ネギま！」世界の在り方としては、Fateにおける「平行（並行）世界」の概念で考えています。

平行世界とは『ある時の選択でAではなくBを選んでいたら、世界は別の道筋を歩む。そういった、数限りなく存在する可能性の数だけ分岐した世界・パラレルワールドのこと』。

世界A
・
世界B
・
世界C
・
・
・
・
世界？

→このように世界は隣り合っているワケですが、その離れ具合Ⅱ距離が離れているほど、その差異は大きくなります。世界Aと世界Bを比較した時よりも、世界Aと世界Cを比べた時の方が世界の違いは大きくなるというわけです。

通常 少し離れているからといって世界に大した違いはありませんが、それがもう有り得ないくらい離れていたら、それはもはや並行世界ではなく「異世界」になるのでは？と考えました。

その考え方がこの小説におけるFate／stay nightとネギま！の世界の関係です。「もはや異世界と呼べるほどに差異が大きくなった並行世界」。そういう位置づけなのです。

え？ それはもう並行世界じゃないだろ？ それは言わないで。

で、何故ネギま！世界出身の士郎が無限の剣製を使えるのか？という点ですが……。過去に臨死体験した士郎が「何故か」英霊の座”に迷いこんだことが原因です。

この「何故か」は非常にご都合主義なのですが、説明させていただきます。

過去、士郎はあくまで「死にかけたⅡ瀕死状態だった」だけで、死んで「根源」に行ったとかそういうことはありません。そもそもネギま！世界にはガイア論、アラヤ識など「世界」というシステムがないので当然ですね。

※ただしFate世界のようなシステムではないというだけで、「世界」の修正など、「『ありえない状況』や『世界の存在に害を及ぼしかねないもの』を忌避・拒絶する」というような感じの「防衛機能」は存在します。

学園祭編でカシオペア同士の戦いになった際、ハカセが「因果律が破綻してしまう為に一定時間・一定距離以上の時間跳躍と擬似時間停止は出来ない」という趣旨の発言をしていました。あまりの無

茶が出来ないという点は同じだと言うことです。

ただ、「世界」の修正は魔術的・概念的なもので、因果律は理論や摂理の観点から見たものであって全く別物なんですからね。

話を戻します。では何故、根源の中に在る（↑この言い方は語弊がありますが）英霊の座に士郎の魂が迷いこんだのか？ 「引っ張られた」からです。

死にかけて肉体という器、枷からの束縛がゆるくなった士郎の魂は、元を同じとするアーチャーIIエミヤシロウの魂に引っ張られてしまった、というのが作者の理屈です。

はい、ご都合主義です。

以上がこの小説における世界観と世界の位置づけと、士郎が魔術をえる理由に関する話です。

納得できない部分があるかと思いますが、そこは二次小説だからと目を瞑っていただけるとありがたいです。

《この小説世界における麻帆良》

・原作よりも危険地帯。大戦当時に行われていた関東魔法協会への「襲撃」が、20年を経た今でも継続して行われている。頻度は年に6〜8回。

・20年前当時の帝国側の魔法使いの残党や、西の陰陽術師たちが主犯。「襲撃」は彼らの属している組織の意思は介在しておらず、あくまで末端の暴走であるが、関西呪術協会はその限りではないら

しい。

・これに対して学園長・近衛近右衛門は魔法使い達による「警備」と学園結界による防衛策を執っている。”夜の警備員”はシフト制。魔法先生は残業扱い、魔法生徒は成績評価に色をつけてもらえる。

・「外部協力者」扱いの士郎には毎月歩合制の給料が支払われている。これはエヴァも同様（エヴァは定額給料）。

・エヴァや超が学園結界を落とす度に危険に曝される面倒な都市と化している。

・京都修学旅行編の出来事をきっかけに西との関係が幾分か改善され、襲撃は極端に減少した。

《この小説世界における冬木市》

士郎以外の Fate 世界の住人もネギま！世界に存在している設定です。でも凜がうまく書けない（作者の力量不足ゆえ）から彼らは登場させません。でも最近ちょっと書いてみたくなってきている。彼女たちは魔法学校に通っていないのか？ などの細かい設定は考えていません。登場させる気がないので。

◎冬木市

かつて衛宮家が居を構えた西日本にある都市・冬木市。東西 JR 線の関係で一度だけ乗り継ぎをしなければならぬが、麻帆良から普通に電車で行ける。

この土地は「聖地」クラスである麻帆良には劣るが、2本の竜脈

と2本の霊脈が通る強力な霊地である。

陰陽術師の勢力が強い西日本にも関わらず、魔法使いの一族「沙条」「遠坂」「間桐」

「言峰」の4つの家が土着して住んでいる。

また、名前に「ヤ」のつく職業の藤村家と竜洞寺の竜洞家に”気を使う人物が確認されている。(雷画さんと藤ねえと零観さんです)

◎冬木四家の設定

..沙条

もともと関西呪術協会に属する陰陽師の大家、その家系だったが、いつの頃からか西洋魔術に転向した変わり種。家の歴史は四家の中で一番古い。

元が陰陽術師の家系である点を生かし、東洋・西洋の系統が入り混じった独自の術式を使用する。気・魔力の習得はこの家の魔法を使用する為には必須事項であり、現当主は究極技法「咸卦法」を習得しているという。その彼の娘は魔法には関わりたくないと考えていて父とは距離を置いている。

..遠坂

約300年前、日本を訪れた西洋魔術師が遠坂家の人間に「うっかり」魔法を見られた事がキッカで魔法を伝授された。その後彼女は自分が魔法バレしてしまった人物と恋に落ち結婚。彼女の血が遠坂に混じることになる。ちなみに彼女は故郷に妹がおり、その妹の子孫が今もフィンランドに住んでいるらしい。

火属性呪文と身体強化呪文に才能を持つ者が多い。ちなみに当家の末裔の長女はなんと全属性適合者(オールユーザー、アベレージ・ワン)であるらしい。

…間桐

日本に移住した魔法使いマキリ・ゾオルケンを始祖とする一族。といってもそれはまだ数十年前の出来事で、高齢ながら彼はまだ存命中。当家は当代の遠坂と仲が悪い（現当主同士の仲が悪いのが原因）。

水・闇・影系統呪文に適性を持ち、呪い・契約などを得意とする。

…言峰

代々冬木教会で神父を務める魔法使いの一族。かつて彼らは基督教の布教が出来る地を探して冬木に流れ着き、そこで遠坂家と懇意になった。遠坂家の援助もあって布教が進み、彼らはそのまま冬木に根を下ろしす。それ以来この二家は仲が良い。

（→ネギま！世界ではシスターシャークティーや美空など、教会関係者が魔法使いであることは基督教の教えに反するものではないらしいのでこの設定で問題ないはず）

ただし「遠坂と言峰の仲が良い」といっても、その末裔のあかいあくまと

毒舌シスターの仲が良いというワケではない。

主に身体強化呪文と、鍛え上げた自らの肉体から繰り出される体術、十字架を武器として戦う一族。

＊冬木についてはこれ以上の設定を作りません。だって登場しないんだもの。

《その他の諸設定》

◎衛宮家

元は関西呪術協会・近衛家の分家。しかし本家から分かれて30年ほどしか経っていない、歴史の浅い弱小分家。数代前の当主が裏社会（陰陽術・神鳴流など）からの引退を決定し、一族は京都から西日本のある地方都市に移り住んで一般人として生活を始めた。しかし衛宮矩賢が京都神鳴流に入門し、再び裏との結び付きが強まった。

◎衛宮一族とその関係者

…衛宮矩賢

息子・切嗣が10代の時に謎の死を遂げる。神鳴流・呪術協会内の争いに巻き込まれたと思われるが、詳細と真実は不明。

…衛宮切嗣

父に倣って京都神鳴流に入門していた。しかし父・矩賢の謎の死に疑念を抱き、「理不尽に命が失われる」ことを嫌悪するようになる。

全ての人間を救う「正義の味方」を目指し、立派な魔法使いという思想を持つ「魔法使い」になるべく麻帆良の近衛近右衛門に師事する。

10年弱の修行を終えて魔法使いのNGOに参加して中東を訪れるが、自らの理想の甘さと限界、現実を知って絶望する。紆余曲折を経て、多くを殺すことで逆説的に多くを救うことを選択。生涯で多くの血と汚名を浴びた。

魔法界では「魔術師殺し」^{マード・メイガス}と呼ばれる。本国出身者・関東魔法協会側の人間からは命を狙われ、関西呪術協会（の一部の協会員）からは英雄視されている。

時間制御魔法を飛躍的に進歩させた人物として魔法世界では有名で、帝国やアリアドネーでは切嗣を「時間技師」^{タイムエンジニア}と呼んで尊敬する人間が少なくない。彼の開発した術式によってダイオラマ球の性能が10～20倍は上がったと言われている。

後に妻との間に娘と息子を儲ける。アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

…衛宮士郎（近衛士郎）

本作の主人公。旧作（ネギま！―剣製の凱歌―）の感想ページにて読者様より「オリ宮士郎」と名づけられるほど中途半端な設定を持つオリ主。

元は「衛宮士郎」だったが家族の死後に詠春に引き取られ「近衛士郎」となる。現在は籍を抜いて衛宮性に戻っているが、何故か近衛家の家系図に養子として名前が残っている（詠春と木乃香の仕業）。

その他の説明はもう要らないと思うので割愛。ぶっちゃけメンディ。今までの設定話を読んでくださいな。

…青山詠春（近衛詠春）

切嗣の神鳴流時代の友人。稽古の合間に会話を交わす程度の付き合いだったが、お互い友人だと感じていたらしい。

切嗣の遺児である士郎を引き取って育てた。今では彼を実の子のように思っている。

…近衛近右衛門

切嗣少年に魔法を教えた。切嗣の遺児である士郎を孫のように思っている。魔法を知って魔法使いを志した士郎を友人が勤めるメルディアナ魔法学校へ送り出した。

自分が士郎に魔法を教えることで、切嗣と同じようになってしまっているのではないかと恐れたのかもしれない。矩賢とも面識があったようだ。

…近衛木乃香

詠春の一人娘。幼少時、父が突然連れてきた”兄”と仲良くなるうとするが、当時まだ家族を失ったショックで茫然自失状態だった士郎はそれに応えなかった。しかし木乃香は諦めず、士郎を笑わせようと奔走した。

現在はお互いの生活に積極的に干渉しようとはしないが、兄妹仲は良い。

…桜咲刹那

詠春に拾われて京都神鳴流に身を置いていた少女。木乃香の最初の友人であり親友。同じく詠春に引き取られて木乃香の義兄となった士郎を胡散臭く思っ警戒していた。

川で溺れたところを助けられてからは心を許すようになったようだ。

◎アインツベルン

ドイツ貴族であり魔法使いの一族。長寿、並みの魔法使い以上の魔力容量、高い対魔力などの優れた体質を持ち、錬金術——「ものをつくる」ことに長けた一族。

本家筋の女性は何故か必ず銀髪・白い肌・真紅の瞳を持って生ま

れる。始祖は雪の妖精だという伝承があるのかなんとか。

遺伝的に女性の方が強い能力を持つため歴代当主はほとんどが女性。その中で男性が当主になるということはその人物が出鱈目な実力者だということを示している。そして先代当主も男性である。

かつて「アインツベルン」の名は魔法具業界における優秀なブランドだった。しかし現在（2000年代）より約100年前に旧世界と魔法世界が繋がり、向こうの優れた魔法技術が流通・普及したために衰退・没落していった。

しかし彼らの技術力は紛れもなく本物である。その「作る才能」は密かに士郎に引き継がれている。

◎アインツベルン一族

…ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン

「アハト翁」と呼ばれた八代目当主と同じ名前を持つ、第二十八代目当主。二人の娘をもつ。現在は隠居し、長女に家督を譲っている。

アイリと切嗣の結婚には大反対だったが、孫にはデレデレだったという。

…アイリスフィール・フォン・アインツベルン（衛宮アイリスフィール）

二十八代目当主・ユーブスタクハイトの次女。NGOに参加した際に切嗣と出会い、彼に惹かれる。後に結婚し、彼との間に娘と息子を儲ける。

アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

…衛宮イリヤスフィール

切嗣とアイリの間生まれた長女。アインツベルン本家の血筋であることを示す身体的特徴を持つ。母親に瓜二つ。アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

死後は運命か偶然か、現在Fate世界の「英霊の座」でアーチャー宅一（？）に居候中。心象世界の剣を通してアーチャーと共に弟を見守る。

…第二十九代目・アインツベルン当主

アインツベルン現当主。ユーブスタクハイトの長女でありアイリの姉。士郎の伯母。

アイリの遺骨を衛宮家の墓に入れることを渋った父親を説得した。なぜ士郎を引き取らなかったかは不明。

アインツベルン最盛期の当主であり、歴代最高最強と謳われるユスティーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンの再来と呼ばれる。

◎この小説における衛宮切嗣のステータス

・魔力容量は並みの魔法使い程度で、得意な魔法は火と重力。

・戦術・戦略・罠・銃火器など近代兵器・魔法を駆使して戦う。

・スキル…破壊工作／ランクA

戦闘を行う前、準備段階で相手の戦力をそぎ落とす才能。トラップの達人。

ランクAならば、相手が進軍してくる前に六割近い兵力を戦闘不能に追いこむ事も可能。

《魔法・武器》

…呪文封印弾（C・S・BⅡキャスト・シール・ブリット）

魔法使い専用独房（ネギま！KC16巻に登場）に使用されている呪文封印処理が施された弾丸。銃弾を約30層に分けて製造し、層の表面に術式を刻んで重ねている。この弾丸が体内に埋め込まれると魔法使いは呪文Ⅱ大半の魔法が使用が出来なくなる。ただしアーティファクトは使用可能。

敵の体内にあってこそ威力を発揮するので、貫通しないように銃弾の先が僅かに丸みを帯びている。

…火炎の魔弾・燃える天空

「燃える天空」の術式を刻んだ弾丸。基本的に着弾時に刻まれた術式が発動するが、戦略的に運用するために遅延呪文（解放エーミッタムと唱える）でも起動する。

地面に撃ち込んでおいて即興の地雷としても使用したりする。戦略に基づいた戦いの時はもちろん普通の地雷を使うので、この弾丸を地雷として使用する時は切嗣にとっての不測の事態か敵との直接戦闘時のみ。

…障壁貫通弾

切嗣が使用する武器・銃器・兵器には全てこの呪いが掛けられている。通常の銃弾も魔弾も地雷もミサイルも全て魔法障壁を貫通する。

＊作者は銃火器に詳しくないのでそれらについての記述は割愛。

Fateは魔術師の物語のハズなのに、なんでZeroはあんなに近代兵器の記述や設定が多いんだ……。切嗣スゴイよ。

メローディア・ベラークス

…『戦いの旋律』

身体強化呪文「戦いの歌カントゥス・ベラークス」の上級版。罠を抜けて切嗣に接近できる腕利きの魔法使いも当然いたので、肉弾

戦に備えておく必要があった。

切嗣は元・神鳴流なので体術も申し分ない。

ムーヴェオ・プロバリウス・テンパス
…『固有時操作結界』

通称「固有時操作」（↑誤字に非ず。あえて「固有時制御」ではない名称にしている）。準備と条件を満たすと使用可能になる。光魔法と重力魔法でそれぞれ光と重力を操作して結界内の時間流を停滞させる。このとき結界の中の人物を結界の外から見るとスローモーションのように見える。

これに敵を捕えている間に周囲に攻撃・罠を仕掛けておき、結界の解除と同時に襲撃する（結界を解除しないと、結界に入った瞬間に切嗣自身の攻撃も時間が停滞してスローになってしまうために攻撃が届かない。Ⅱ止まった時の世界で主人公にナイフを投擲するザ・ワールドな吸血鬼と同じ戦法かもしれない）。

無詠唱呪文に長けた魔法剣士や魔法拳士、魔法使いの従者に対する切り札。

Fate／zeroの「固有時制御」の「固有時」とは「術者の肉体の時間」を指すが、この結界の「固有時」とは「指定された領域内の時間」を指す。

なお、この固有時操作は「停滞」だけでなく「加速」も出来るが、固有時制御と違って体内展開が出来ないため加速にはあまり意味がない。

《まとめ》

・基本的には罠を使った戦術などを用いて陰から戦い、正面きって相対して戦うことはあまりない。特技は暗殺。スキル破壊工作・リンクAは伊達じゃない。

・「呪文封印弾」で魔法使いを無力化し、「戦いの旋律」「魔弾」「固有時操作」で魔法使いの従者・魔法剣士に対抗する。

「敵を殺すのに相手より強い必要はない。ただ、殺す手段があればいい」

＊以上で世界観設定の説明を終わります。読了お疲れ様でした。

番外話 オリジナル宝具 十追加（2011／9／11）

はい始めました、誰でも1度はやってみる「オリジナル宝具」のコーナーです。

興味のある方はどうぞ読んでいってください。

「真つ赤な嘘」
ハイド・オブ・トゥルー

イソップ童話「嘘をつく子供」（＝狼少年）の逸話がカタチになった宝具。

（I hide the truth. Ⅱ私は真実を隠します。をモジった。

「ハイド・オブ・トゥルー」Ⅱ「真実の皮」。真実を覆い隠す姦計の皮。）

・能力…真名解放直後に発した言葉が指す事実を完全に隠蔽する。

例…真名解放して「ここで戦闘を行った」と言えば、どれだけの目撃者がいようとその事実当事者以外の人々の記憶に残らなくなる。カメラなどからも消え失せる。

あらゆる調査を回避し、情報隠蔽に特化した宝具。あくまで「当事者以外には知ることができなくなる」だけなので、事実を無かったことにしているわけではない。

「尊ぶべき三叉の海」
トライデント…ランクA（とうとぶべきさんさのうみ）
海神ポセイドンが持っていた三つ又の槍。

・能力…

水または液体を自在に操る力を持つ。ただし生物の体内の水分は操れない。

水がある場所ではランクがA+に、海に近い場所ではランクEXに上昇する。この宝具の力で操作される水は、操作されている時のみこの宝具と同じランクの神秘・魔力を帯びる。

言ってしまうえば操る水そのもの全てを宝具と化してしまう。

「必中する無蹉^{フエイルノート}踏の弓」（ひっちゅうするむさてつのゆみ）

アーサー王伝説に登場する円卓の騎士トリスタン、彼が作った豎琴のような形状の弓。

・能力…

狙った場所に必ず当たる矢を放つ。故に「無駄なしの弓」と呼ばれた。しかしそれは弓の能力ではなくトリスタンの技能^{スキル}だという説もある。

「大御葬歌^{ミストルティン}」（おほみなりのうた）

北欧神話に登場する剣。

伝承…

世界中のあらゆるものから傷つけられない力を持っていた光の神・バルドルが、その力の唯一の例外であるミストルティン（ヤドリギ）の木の枝が胸に突き刺さって死亡したというエピソード。

さらに「ミストルティン」という名前の名剣が別の伝承に登場する。

「剣」であり「神を殺したヤドリギ」でもある「ミストルティン」。
この2つの伝承がミックスされて生まれた対神宝具。

おほみなのうた

大御葬歌……日本の天皇の葬送のときに演奏するもの。起源は武神と崇められるヤマトタケルノミコトが死した際、彼の妻と子供達が歌った三首の歌。

神の死を悼み、あの世へ送り出した歌である。

・能力…

剣の宝具だがその伝承により、投擲または矢として使用した時に真価を発揮する。

宿る概念は『神殺し』。神霊クラスの存在を完全に滅ぼす力を持つ。神をも殺す剣ではあるが魔剣ではない。

※北欧神話と日本神話をごちゃ混ぜにしたネーミングの宝具。

「神の死」にまつわる伝承を探したら「武神ヤマトタケルノミコト」と「大御葬歌」の逸話を見つけたので、これ幸いと「ミストルティン」と混ぜてみました。

「万象毀つ神槌」シヤルウル（ばんしょうこぼしんつい）

戦闘と豊穰（農業・狩猟）を司る、メソポタミア神話の大地神ニンウルタの持つ棍棒。「すべてのものを破壊するもの」という意味の名前で「戦闘の洪水」という異名を持つ。

（ニンウルタの名前には諸説あり、ニンギルス、ニヌルタとも呼ばれる。）

・能力…

オーバーキル・ファンタズム

即死宝具。有機物・無機物・物質・エーテル・実体・霊体関係なく、この宝具の攻撃を受けた者は例外なく破壊され殺しつくされる。

ただしこの宝具よりランクが上の宝具や魔術は破壊できない。そしてひとつの対象につき一度しか使用できない。

防御系の宝具（＝結界宝具）が使用された場合はその宝具のルールが優先して適用される。「投擲されたシャルウル」なら「ロー・アイアス」には勝てないし、当然「アヴァロン」も貫けない。

「雷の牙」 ヴァジュランダ

インドの伝承「ラーマヤナ」という物語に登場する、ラーマという英雄の持つ投げ槍。とある聖者より授かった神々の武器だという。ラーマは神々の化身である猿たちの王スグリーバに協力し、スグリーバの兄である猿王バーリをこの槍で倒した。

・能力…

「神殺し」の概念を秘めた対神兵装。神霊クラスの霊格を完全に打ち滅ぼす力を持つ。

「惑い眩ます光焰の剣」 クラウ・ソラス（まどいくらますこうえんのけん）

ケルト神話に登場する剣。

ダーナ神族の王ヌアザが所持する剣。鞘から出れば光を放ち周りの者の目を眩ます。他にも「抵抗すらさせずに敵を二分する不敗の剣である」「隠れた敵を探し出してひとりでに倒す」「不敗の剣」

「光の剣」「炎の剣」など多くの伝承を持つ。

・能力…

鞘に納められた状態で真名を開放すると、抜刀した際に閃光を放ちそれを見た者の視力を奪う。奪われた視力を回復する為にはこの宝具の担い手を倒すしかない。ただし視力を奪われたのがサーヴァ

ントの場合、パスを通してマスターの視界を共有して物を見ることができる。

「ゲイボルク」のように、宝具として複数の真名を持つ。「惑い眩ます光焰の剣」は「光で敵の目を眩ませるクラウ・ソラス」の真名。

「光で敵の目を眩ませる」「隠れた敵を探し出して攻撃する」、この2つのクラウ・ソラスの真名を開放した相手にのみ、第三の能力「抵抗すらさせずに敵を二分する（仕組みはゲイボルクやフラガラックのような因果逆転による攻撃キャンセル）」が発動可能になる。しかし第三の真名解放は一度しか行えず、第三の能力を使用した相手には以後 他2つの真名も解放できなくなる。

「人喰い刀」^{エピタム}

アイヌ民話に登場する人喰い刀。別名「エペタム」。

伝承…

祈りを込めるとひとりで飛んでいき何百人の敵でも追い払う。飛ぶ際に稲妻のような光を放ちながら光の尾をひいて飛び回る。また刀の出す「カタカタ」という不気味な音を聞くと敵が逃げ出すという。

ある村の酋長の家に安置されていた刀。エピタムは1人の英雄の武器ではなく、その村の老人たちだけが知っている「祈り（＝制御方法）」にて運用されていた。しかし老人たちが亡くなって祈りを知る者がいなくなると暴走を始め、村人が神に縋って解決法を得るまでに多くの人間を喰らったという。

・能力…

特定の担い手も「祈り」を知る者もない為、制御ができない。一度鞘から抜かれれば人間を喰らい続け何をしてもしまららない。ただしこの刀は人を食べない時は石を食べていたと言われており、「石」の近くにいれば僅かな間だけ鎮めることができる。

この刀の鳴らす音を聞いた相手の戦意を削ることができ、敵のパラメータの幾つかをランダムでワンランク低下させる。この宝具の担い手がサーヴァントであった場合、担い手とそのマスターにはパラメータ低下が発生しない。

「エツケザックス遍し守りを貫くもの」（あまねしまもりをつらぬくもの）

ゲルマンの伝承「シドレクス・サガ」に登場する剣。

ディートリッヒが巨人エツケを倒して手に入れた「サクスエツケの剣」という意味の名前の剣。この剣にはどんな丈夫な楯でも耐えられないという。

・能力…

この宝具よりもランクの低い魔術やスキル・宝具による防御を破壊・無視してダメージを与える。ランクを上回る防御でも「筋力値×50%」の貫通ダメージを対象に与える。ただしやはり「アヴァロン」は例外。

「アスカロン守護聖剣」

基督教の聖人・聖ジョージ（聖ゲオルギウス）が竜退治に使用した剣。彼には数多くの竜退治の逸話が存在しており、中には槍で倒したという話もある。

伝承…

11世紀、十字軍兵士達の前に聖ジョージの幻影が現れたという伝承により、彼は戦士を守護する聖者になった。さらに14世紀にはイングランドの守護聖者と認定され、それ以外にもグルジアやモスクワ、更には武器職人・旅行者・農民をも守護している。

……忙しそうだ。

・能力…

宿す概念は『竜殺し』。幻想種より強力な存在である竜種（※位階は幻想種の方が上）を殺害し完全に討ち滅ぼす力を持つ。さらに他者を守る戦いにおいてのみ、自身（アスカロン）のランクと担い手のパラメータをワンランク上昇させる。そして聖剣でもある。

イーブン・イフ・ソード・ブローケン

「刀折れ矢尽きるまで」

オリジナル。参考となる伝承はなし。でもちゃんと探せば該当するような伝承があるかもしれない。

・能力…

戦闘続行スキルと類似した能力。「十二の試練」や「騎士は徒手にて死せず」等と同じ「宝具能力」。

己の武器（宝具含む）が全て破壊されない限り、致命傷を受けても死ぬまで戦闘を続行できる。所持する武器や宝具の数だけ効果が増す宝具で、例えば士郎やアーチャー、ギルガメッシュがこれを保持していた場合、「無限の剣製」「王の財宝」内に貯蔵される全ての武具が破壊され尽くすまで行動できる。

…刀折れ矢尽きる（＝弓折れ矢尽きる）

戦う手段をすっかり使い果たす。また、物事に立ち向かう手段がなくなる。

Even if sword broken. Ⅱたとえ剣が折れていても。

「ヤグルシ・ワオ反逆して且つ・アイムール駆逐する者」

ウガリット神話に登場する、「アイムール反逆するもの」と「ヤグルシ駆逐するもの」という名の一对の棍棒。水神ヤムを倒すために嵐の神バアルが用いた対神兵装にして神の武器。

・能力…

投擲すれば遠隔操作が可能。この棍による攻撃を受けた者のスキル・特殊能力の類を全て使用不可にする。

しかし英霊も宝具も、伝承の在り方というものに縛られる。この宝具の能力を発動するためには、「先ずヤグルシを投擲し、それを敵が避け、次いで投げたアイムールが敵に命中する」というプロセスを経なければならない。

＊2011／9／11、以下のものを追加。

「ホアンキエム湖還剣」 ランク…B

ベトナム民話の英雄で実在の人物、レイ・ロイ黎利が用いた「湖の宝剣」。

・伝承…

レイ・ロイは12世紀頃の実在の人物。彼はあるとき湖で神剣を手に入れ、これを天帝からの授かりものとして戦った。この剣を抜き放てば敵は戦意を失い、倒れ、逃げ去ってしまうという。

後に剣を湖に返したという逸話から「湖・還・剣」という意味を持つ”ホアンキエム”湖と呼ばれるようになった湖が今もハノイに実在する。

湖還剣……こかんけん。決して深読みしてはいけない。

・能力…

対峙した敵のパラメータをツーランク低下、スキルをワンランク劣化させる。

(例…A↓C、A++↓C++、E↓E--、EXには効果なし)
ただしどのパラメータ・スキルが弱体化するかはランダムで、その判定は対象の幸運値に左右される。

さらに、この能力の元になっている逸話が「敵の戦意を失わせる」ものであるため、精神攻撃を無効化するスキルを持っている、「パラメータを下げられない」「ランクを下げられない」という性能のスキルを保持している相手には効果が弱体化し、パラメータのみをワンランク低下させる。

宝具のランクは下げられないため、サーヴァント戦では強力な宝具を持っていることが多いアーチャーやライダーのクラスが天敵となりうる。

(……どっかの円卓の白騎士や裏切りの騎士や腹ペコ王は能力が軒並み高いくせに宝具もデタラメに強力という他のサーヴァント涙目なチートですが……)

「フスベルタ苦しんで死ね」 ランク…C

八世紀フランク王国、国王カール大帝に仕えた騎士ルノー・ド・モントヴァンの剣。

(モントヴァンは実在したと明言していない資料もあるため、ここ

では「実在したといわれる人物」として扱う)

彼は『エイモン公の4人の息子』『シャルルマーニュ伝説』などでリナルドという人物として登場する。

・伝承…

フスベルタは「フランベルジュ(炎の刃)」という剣の原型だという伝説を持つ。

フランベルジュは刃の形状が波打つ炎のような形状をしており、これは単に装飾的な意味合いだけでなく、敵に致命傷を刻むために作られている。

結論を言えばこの剣で斬られた傷は治りにくく、戦闘から帰還できても傷口から破傷風などに感染し、兵士は苦しみながら死んでいったのだという。このことから「死よりも苦痛を与える剣」と呼ばれた。

『シャルルマーニュ伝説』では、フスベルタは魔法の剣として扱われている。

・能力…

決して癒えない傷を与える。治癒阻害・回復阻害の呪い。

傷口が塞がることはなく、人間ならば失血死する。サーヴァントなどの霊体に対しては追加の呪いが発動し、塞がらない傷口から魔力が漏れ続ける。サーヴァントが現世に存在を留める為の糧である魔力が失われていくのである。

また「炎の刃」という伝承により、この剣でつけられた傷は常に熱を持って対象の体力を奪う。

これらの呪いを解くにはこの宝具を破壊するしかない。長期戦に秀でた宝具。

「確実に致命傷を与える」「より長い苦痛を与えて死に至らしめ

る」というフランベルジュの性質が、原型であり同一の存在である
フスベルタに反映された。

「オリジナル宝具」のコーナーはこれで終了です。
また思いついたら追加するかもしれません。

それでは次回。

番外話 オリジナル宝具 十追加（2011／9／11）（後書き）

＊フスベルタの「苦しんで死ね」は表現として過激でしょうか？

一応R15指定と残酷描写ありのタグは付けていますが、苦情・意見・要望が来たら修正します。

Fateを知る者ならば…誰でも一度はオリジナル宝具を作ってみたことがあると……。

——私は信じている!!（↑アホ）

— 5話 京都編 関西呪術協会・子供会（前書き）

小説らしい小説が始まる最初の話なので、設定話1に続きもう一度挨拶を。

改訂版からお読みになってくださっている読者様、初めまして。改訂以前、「ネギま！―剣製の凱歌―」から読んでくださっている読者様こんにちは。佐藤Sと申します。

この小説、基本的には以前のものを「直したい部分だけ直した」ものなので、以前とまったく変わっていないような話を投稿することもあります。なにとぞ大目に見てくださるとありがたいです。

これからも「剣製の凱歌」シリーズをよろしく願います！

一5話 京都編 関西呪術協会・子供会

肩口まで伸ばした黒髪を全て左に纏めて結えた、袴姿の女の子。
ツヤのある黒髪を腰まで伸ばした着物姿の少女。
そして――

「きゃあああ――――！！！」

「わ―――っ！わ―――！！！」

「ばうばうばうばう！！！！！」

「……………」

「ってシロウなにしとるん！？ はよ逃げーな！ あーもーー！！！」

赤い袴を履く少女と色違いの黒い袴を履いた、赤い髪の少年。
彼は赤い袴の少女に襟を掴まれ、されるがまま引き摺られていった。

近衛木乃香・桜咲刹那4歳、衛宮士郎8歳の頃の話――。

「お嬢様、何をされているのですか」
「ひゃうっ!？」

背後から聞こえた、自らを咎めるような声に木乃香がビクツと肩を震わせた。

「ここは板場です、包丁などもあるのですよ? 危ないではないですか」

「えへへ……ごめんなー」

少女はそう言って申し訳なさそうにほにやっと笑う。すると呪術協会の大抵の者はそれ以上彼女に何も言えなくなってしまう。関西呪術協会本山・? 毘古社の姫（でありアイドル）である彼女は——周囲から非常に溺愛されていた。

調理場に入ったことを咎めた巫女もその部類で、諦めたように息を吐いた。

「それで何をされていたのですか? かくれんぼでしたら他の場所へ行ってください」

「むー。かくれんぼしとるよーにみえる?」

「……………見えませんね」

板場の作業台の上にはまな板が置かれ、その周りには野菜だったり果物だったり、その他統一性のない食材が所狭しと並べられている。

「おかしつくりー思ってん！」

巫女は目を見開いた。

「……………この材料ですか？」



『初めまして士郎くん。私は君のお父さんの昔の友達で、近衛詠春といひます』

『士郎くん、君さえよければ、君を引き取りたい——君を、私の子供にしたいと思っていますが』

その話を受けたのは、士郎にとってただの気まぐれ。

見ず知らずの人間ばかりの場所に放り込まれるよりは、自分の父親の友人であったという不健康そうな眼鏡の男の所に行く方が、いくらかマシだろうと。そんなテキトーな考え。

だってこの世界に居ることに、士郎は価値を感じない。

家族に、みんなに会いたい。

／＼そのためには天国に、あの世に行くしかない。自分も死ぬしかない。

その考えに思い至った瞬間、士郎は絶望した。

あの地獄で死を隣に感じ、死の痛みを体感し、あの場所から帰って来た。そしてそこから帰って来れなかった姉の姿が脳裏をよぎる。フラッシュバックする。

——死にたくない。

死にたいけど死にたくない。そんな想いが、士郎を惰性で生かすことになる。



事の発端はひと月ほど前に遡る。

『ただいまこのか。いい子にしておきましたか？』

『おかえりなさいーいおとーさまー？ ……？ おとーさま、その子だれ？』

『そうでしたね、彼の紹介をしなくては。——このか。彼は君の兄弟だよ』

『…………ほえ？』

そうしてこの場所へやってきた赤い髪の少年、旧姓「衛宮」近衛士郎。

物怖じしない、というか天然である木乃香は積極的に士郎にかまっていたが、彼女はそこで思わぬ事態に直面する。

『ほな、つぎはおにごっこしよー♪』

『…………おれは別に…………』

『シロウ！ アンタこのちゃんがせっかくあそぼゆーてんのに…………！』

『あつ せっちゃんおこらんといて〜』

笑わないのだ。士郎は。

遊んでいても話しかけても、いつも口を一文字に結んで表情を崩さ

ない。

極めつけはその直後の事件。

たまに協会の敷地に出没する子犬がおり、それに木乃香が泣かされることがまあった。

以前 刹那が竹刀でその子犬を追ひ払うことに成功したのだが……。

先日、再び子犬が現れた。そしてそのとき刹那は竹刀を持っていなかった。

彼らは大人達が駆け付けるまで、吠えられながら散々追い回された。

だが士郎はその時ですら反応を示さず、刹那が引つ張り出すまで逃げたそうともしなかった。

木乃香は、士郎が恐ろしくなった。

吠えられて怖ないん？ 噛まれたらどうするん？ 何で逃げへんの！？

———なんでいつも、そんな眼で———！

『このか。士郎はここに来る前にとっても辛いことがあったのです。できるだけ、優しくしてあげてくださいね』

父の言葉を思い出す。

もともと士郎を外に連れ出したり遊びに誘ったのは、その言葉を受けた木乃香の、彼女なりの優しさだった。

……それにそっけない態度ばかりとる士郎に、刹那はいちいち憤慨していたが。

そして――木乃香は決心する。「士郎を笑わせてみせる」と。

「せやから、おかしつくろうおもったんや」

作戦名『美味しいものを食べれば皆ハッピー』。

「…………しかしわざわざ、お嬢様が自ら作らずとも…………」

「てづくりのほうがおいしいってきいたえ？」

こてんっ、と心底不思議そうに首を傾げた姫を見て、巫女は心の中で白旗を上げた。

（お嬢様、可愛らし過ぎです……ッ！！）

ひとり悶える巫女を再び不思議そうな顔で木乃香が見つめると、それに気づき彼女は即座に姿勢を正す。

「…………こほんっ。わかりました、しかしおひとりではダメです。誰

か大人の方と一緒に料理してください。私が板長に話しておきましよう。ですから今日はやめてください」

「はーい」

巫女が狂喜するような笑顔を残し、少女は黒髪を揺らして てててと歩いていった。



後日。新品のエプロンを着て板長と一緒に板場に立つ木乃香の姿があった。ちなみに割烹着も用意されており、エプロン姿と共に記念撮影が行われたのは言うまでもない。

「お嬢様は初めてのお菓子作りですし、簡単な饅頭おまんと団子を作りますよう」

「はーい♪」

後日焼き上がったそのときの愛娘の写真を見た詠春が、そのカタブツそうな顔を蕩けさせたのも言うまでもない。

その写真は極秘に無断で焼き増しされ、呪術教会・木乃香お嬢様ファン倶楽部の会員が数日間ホクホク顔だったことはもっと言うまでもない。

「んしょ、んしょっ」

材料は強力粉、薄力粉、団子粉、黒こしあん、白こしあんetc…

声を出して、心をこめて一生懸命 生地をこねた。

・ ・ ・ ・

「できたぁっ!!」

「とてもお上手ですよお嬢様」

「素晴らしい出来栄えですお嬢様ッ!」

小さな掌にボテッと白い饅頭が乗っている。プロや板長のものと比べるとさすがに歪で不格好だが、初めて作ったにしては間違いなく上出来な部類に入るだろう。

「わーいわーい! シロウんトコもってこーー!」

「あぁっお嬢様 手を洗ってください、それに皿に盛り付けませんと——」

後片付けをしろと誰も言わないのは、自分達の姫をつい甘やかしてしまう彼らの悪い癖だった。

・

・ ・ ・ ・

？毘古社の一角、とある社の縁側に、ちよこんと並んで座る兄妹の姿があった。

……それを陰から見つめる約一名の少女がいるのはご愛嬌。

(わくわく♪ わくわく♪)

「どや？ おいしい!？」

「……………うん。美味しいと…思う」

(ワクワク♪ ワクワク♪)

「……………もぐ…もぐ…。」

(……………わくわく……………。)

「……………もぐ…もぐ…。」

(……………。)

「……………なにさ？」

(……………しゅん……………)

「……………?..?」

——惨敗だった。

（——シロウエ………!!）

2人は幸い（?）、刹那が陰から発する殺気に気づかなかった。

（………美味い）

士郎の表情がいつもより柔らかいものだったことにも、落ち込んでいた木乃香は気づかなかった。



「そうですか、このかがお菓子を」

先日の巫女が事の顛末を報告したのは協会のトップ、「西の長」近衛詠春。

かつて、魔法世界の存亡を懸けた戦いで力を振った一団「紅き翼」。

その一員にしてサウザンドマスターの盟友。魔法界でサムライマスターの異名を執る救世の英雄のひとり。

連日の激務ですっかりこけてしまった頬が不健康な印象を与えているが、それでも彼の眼は穏やかだった。

「あの娘は、本当に優しい」

その声が聞こえたのは、いま彼の執務室に居る2人だけだ。

「…………長。本当に…それだけのことでしょうか？」

恐る恐る、巫女は震える声で話を切り出した。ずっと胸に抱えていた、その疑問を。

詠春は何も言わない。その目で彼女を見やる。続けろということなのだろう。

「確かにお嬢様は心優しいお方です。しかし…………木乃香お嬢様は恐ろしくないのでしょうか？——士郎様が」

あんなおそろしいものをわたしはみたことがない——巫女はそう言葉を続けた。

「彼は…………あれは、”空虚”…なんででしょうね」

「——は…………」

疲れたように溜め息を吐き、詠春が口を開いた。

「あの子は＜不幸な事故＞で全てを喪いました。そして、胸を抉るような現実にも力で独り投げ出された」

人が生きながら焼け死んでいく世界で、彼は独り生き残った。

空気すら焼ける灼熱の世界で、見るも無残な姉の死を突きつけられた。

そこは彼にとっても、彼でない誰かにとっても。地獄以外に成り得なかった。

そのとき燃え尽きてしまったのか。壊れてしまったのか。死んでしまったのか。

それは誰にもわからない。

唯一つ確かなことは。

少年はその大事な心を、その地獄に永遠に置き去りにしてしまったということだけ。

———いまの「土郎」には、こころがない———。

それでも木乃香は土郎から離れていかなかった。

大の大人さえ恐怖を催さずにはいられない、その”虚無”を感じ取ってなお彼女は傍に在り続けた。

「あの娘は……本当に優しい」

優しさと甘さは度々イコールで結ばれる。だが今回は違う。優しさは「強さ」に成りうるのだと。詠春は今までの人生の中で初めて気づかされた。

『シロウ———!!』

下の庭から、騒がしい声が聞こえる。いま本山にいる者達の心はおそらくひとつになっているだろう。「ああ、またか」と。

「噂をすれば、ですね」

「……ええ。また刹那が士郎様を追いつけているのでしょ」

理由は先ほどの「このか手作りお菓子の一件」だろう。

「——平和ですね」

時折り聞こえる子供達の元気な声は、関西呪術協会の日常になり始めていた。



川辺ではしゃぐ、「妹」と「友達」の声が聞こえる。

それでもいつも通り少年はその輪に加わることなく、昨日の雨で濡れた雑草の上に構わず腰を下ろしている。

彼はただ気だるげに、自らにとって何ら価値のない世界を瞳に映していた。

それでも無意識に、2人の少女を常に視界に入れていた理由を、彼はまだ知らない。

「妹」？ 「友達」？

くだらない。自分はある日からずっと独りだ。家族なんてものはない。無い。

何もかもが億劫で、あらゆるものが無価値で、世界の全てがどうでもいい。

だというのに。何故かあの「妹」はいつだっておれに笑いかける。

おれが気に入らないくせに、あの「友達」も一緒になっておれを連れだそうとする。

——放っておいてくれよおれの事なんか。なんで構う。なんで笑う。

（—— 一体、なんだっていうんだ。）

そんな士郎の苛立ち^{いらだち}は、突如別の思考に支配される。

——ドボンッ!!

「——え」

不意に、少女の片割れが姿を消す瞬間を視界に収めて。

「こ…このちゃんッ!」

刹那が悲痛な声で叫んだ。突如起こった事態^{げんじつ}に数瞬動きを停止するも、直ぐに親友を助け出そうと慌ただしく辺りを見渡す。しかし力になってくれそうな大人は近くにいない。

そのとき、刹那の目が士郎を見た。

だが役に立たないと判断したのか。刹那は足元に落ちていた長い木の枝を掴んで走りだし、流されていく木乃香に必死に突き出す。

「このちゃんっ! こ、これにつかま——」

昨日は雨だった。増水した川は流れが激しく力がある。

それは同時に、刹那の足元も露に濡れていることを示していた。

「あっ」

激しい水音をたてて、刹那もその身を川に落とした。



数秒。ほんの数秒だ。

たったそれだけの時間で、自分を取り巻く2人の少女が抗い難いものに飲み込まれた。

——だが、自分にどうしろという。

家族でも友達でも、何でもない少女達の為に、いったい何をしろと言うのか。

正直どうでもいい。だが助けないわけにもいかない。誰か大人を呼ばなければならないだろう。

『――！』
『――！』

2人の叫びが士郎の耳を叩く。それは士郎の頭を支配した。

大人を呼んでいる時間があるのか？

自分が助けに行った方が助かる可能性が大きいのでは？

「————いやだ」

頭に浮かんだ考えを、士郎は即座に棄却する。その可能性は危険性。士郎自身も道連れになる恐れが大いにある。そうなった結果、訪れるのは————

息苦しい程に心臓が胸を叩く。もはや呼吸することすら困難になる。それを無理やり押さえつけ、士郎は立ち上がって川から背を向ける。

「死にたくない。おれはまだ死にたくない」

『違うだろう。お前が助けるんだ』

「ッ!？」

いま聞こえた声の主を探して、立ち止まって辺りを見渡す。———誰もいない。

「なに言っただよ！　だったらあんたが助けろよ！　なんでおれが……なんで！！」

耐えきれなくなって士郎が喚く。そして――気づいた。

――なんで。

苦しい程に心臓が動くのは、なぜ。

苦しい程に呼吸が荒いのは、なぜ。

思わず背を向けたのは、なぜ。

耐えきれなくなったのは、何に對して？

嫌だったから。

激しい動悸は焦り。苦しい呼吸は恐怖。背を向けたのは”彼女たちの死”から。
失うことに、耐えられなかった。

父を喪い、母を喪い、姉を喪い、そして今また――妹と友達が。

家族でも友達でも何でもない？

そんなこと、ない。

いつだって笑ってる。いつだって怒ってる。いつだって、傍にいた。

木乃香と、刹那。

“お前らまで俺を、置いていくのか——”

『往けよ。きつと後悔する』

この数秒もない出来事を経て。

士郎は川に沿って駆けだした。



森の中の川沿いに、ずぶ濡れになった3人の子供がいた。

1人は息を切らして大の字に寝転び、他2人は咳き込みながら座り込んでいる。

増水した川の勢いは激しかったが、増水したゆえに水かさが増し、士郎はなんとか2人を引き上げることに成功した。

だがこの結果は、現実には奇跡だったと言っている。8歳の子供が

たった1人で、4歳の子供2人を川から引き上げる。それがどれほどの困難か。本来ならば3人とも溺死していた。それを理解していた士郎はそれでも、助けないわけにはいかなかった。

「ゲホッ…ケホッ……。…ごめん…このちゃん。ウチ…もっと強おなる…！」

「え？…そんなんええよ…けほっ、一緒に遊んでくれるだけで」

2人が、士郎の意識がないことに気づくのはこの直後。

地元の大人が偶然通りかかり、3人の身に起こった事態が協会に伝わるのは約1時間後。

このときの会話が…2人の少女の後々にまで影響することになると知るのは、約10年後のことだった。



「…………どこだった」

いや、俺の部屋の天井だってことは間違いない。いま俺は自分の部

屋で、自分の布団の上に横になっている。ただどうして、こんなことになっているのかというワケで――

「ふみゆ……」

びっくりして声の方に顔を向けると――木乃香が、俺の横で座ったままうたた寝していた。船を漕ぐようにこっくり、こっくりと頭が前後に揺れている。

……だんだん思い出してきた。そうだ、俺は――

――スウツ……。

「このちゃん、シロウ起き……」

……ぱっちり目が合った。

襖を開けて入って来た刹那と、横になった士郎の視線が数秒間絡み合う。

「お………」

（…………お？）

「長あ――！！　しろっシロウが目を覚めましたあああああ

あ！！！！！」

耳を塞ぎたくなるような大声をあげて走り去る。廊下に響くドタドタという足音が僅かに遠くなった頃、ようやく木乃香も目を覚ます。

「みゅー……。あ、シロウおはよー」

「あー…おはよう」

「……………っ!？」

寝ぼけ眼をこすっていた木乃香が、目を見開いた。

「……………しっ…シロウ……………!!」

「おわぁっ!？」

ようやく脳が覚醒したのか、士郎が目覚めっていると理解したとたん木乃香は彼に抱きついた。

「……………ドタドタドタ……………ばたんっ!!」

「シロウッ！起きてる……………ッ!？」

（あ、死んだ。）

士郎は桜咲刹那という人物を自らの友人だと認識してはいるが、おそらく彼女の方はそうではない。

自分が木乃香と仲良くする度に彼女は、士郎を怒鳴ったり竹刀を振り回して追いかけてきたりエトセトラ。

たぶん、いや確実に嫌われている。それが士郎の考えだった…のだが。

「……………え？」

刹那は士郎を見るなり硬直し、その目に涙を溜め始めた。

「……つく……ひっぐ……ふえ…」

その姿に、士郎は声を出すことも出来ず——彼女の為すがまま抱きつかれた。

「シロウ……シロウ……！」

「……………。」

呆然とした士郎と、彼に抱きつく木乃香と刹那。
そんな3人の姿に頬を緩めた詠春は、部屋に入ることなくそつと襖を閉める。

そのまま踵を返そうとして――縁側を歩きながら――ふと庭を見て、足を止めて空へ顔を上げる。天気は快晴。どこまでも青い、蒼い空だった。

(士郎^{あの子}はもう、きっと大丈夫)

「あの世で君に謝らなくて済みそうですよ、切嗣」

―――――ありがとう、詠春。

彼は自分の正面から歩いて来る医師に少しだけ待つよう伝えて、軽い足取りで執務室に帰っていった。

この後^{のち}、関西呪術協会に響く子供の笑い声は3人分が増えたのだった。

ただそれも、長くは続かないが――。

短くない年月を経たその先に、再び彼ら3人が笑い合える日がやって来る。

その時を、楽しみに待っていよう。

《おまけ》

士郎が目覚めた数分後。

刹那「あ、あの……し・シロウ……その、たすけてくれてあ、ありが……」

士郎「ん？　なんだ？」

刹那「な……なんでもな——い！！」

士郎「げはあっ！！？」

木乃香「せ、せっちゃんなにしとるん！？」

顔を真っ赤にした刹那の正拳突きが、士郎の鳩尾に見事に入りましたとき。

チャンチャン♪

一 5話 京都編 関西呪術協会・子供会（後書き）

《裏設定》

「アンタの親父さんはなア、ウチみたいな人間にとっては英雄や」

「長も英雄なんて呼ばれとるけども…ウチから大事なものを奪ってつた奴らの仲間を、ウチは英雄やなんて絶対呼んでやらへん」

幼い自分に背中を向けて、涙を殺して声を絞り出すその女性は「天ヶ崎千草」と言うことを、士郎は終ぞ知ることはなかった。

＊実は会ったことがあるという裏設定。士郎の方が覚えてないうえに、めんどくさくなって改訂前の修学旅行編では描写しなかった。改訂版では千草の1人語りで描写してもいいかもしれない。

（よりによって…何でアンタが。何でアンタがウチの前を遮るんや士郎——！！）

……ってカンジ？ うーんどうだろ。

＊ちなみに以前、「ネギま！―剣製の凱歌―」の、「修学旅行編の」「あとがきにのみ」「名前だけ登場した」「京都編の人物」「鍋島柚衣」サン。

彼女は今話の出来事の後に士郎の教育係になる予定。ああ、登場させられなかった……。……登場させようと思えば出来るんだけど。面倒だから。

〈補足・解説〉

…少女はそう言って申し訳なさそうにほにゃつと笑う。

由紀香ちゃんはマジ天使だと思う。（あれ？木乃香の話だったはず……）

…時折り聞こえる子供達の元気な声は、関西呪術協会の日常になり始めていた。

士郎の実の父親である切嗣は協会の反関東派に英雄視されているため、呪術協会全体から士郎は煙たがられたりしていません（近衛家の養子にするのとはどうかと思っっている人間はいるが）。刹那は神鳴流であり、木乃香は言わずもがな。

この3人の微笑ましさは関西呪術協会の癒しとなっています。

…「違うだろう。お前が助けるんだ」

…「往けよ。きつと後悔する」

この声は士郎の幻聴ではなく、自覚していない己の心の声というわけでもなく。実は「ネギま！―剣製の凱歌―」バッドエンディング後の士郎が”時間旅行”で過去にやってきたという設定。

そして実は…当初はそのバッドエンドルートがトゥルーエンドになる予定でした。今ではハッピーエンドを目指しています。

ぶっちゃけ「仮面●イダーカブトのTV版と劇場版の関係」と似たようなモンですかね？

…“お前らまで俺を、置いていくのか――”

士郎の一人称が「おれ」⇒「俺」になるという判り辛い変化。士郎の成長、心情の変化を象徴しています。

このあと士郎のセリフから「……………」が減って流暢に喋ったり考えたりするのは「新しい心」が生まれたからで、「死んだ心」が生き返ったわけではない。

つまりある意味、心を失う前の士郎と現在の士郎は別人とも言える。

疑問点・お気づきの矛盾点がありましたら感想までお寄せください。

それでは次回！

—4話 英国編 平穏を奪う闇（前書き）

改訂前Ver. に全13話で書いた過去編、それを全3話に再編集したのが今回の「英国編」です。

ぶっちゃけ「改訂前の方が面白い」というのが作者の自己評価。でも以前のは長過ぎたよねという反省から短くしました。

そのため展開が速いとか唐突だとか心情描写が拙いとか欠点だらけでしかもそれらを改善出来ていない。しかし私、小説は自己満足の為に書いてますので別にいいんです（オイ

※今回から始まる「英国編シリーズ」はオリジナル要素が強いので、ご注意を。

それではどうぞ！

— 4話 英国編 平穏を奪う闇

「は、初めまして。私、エレナ・キャンベルって言います……あなたのお名前は？」

「よかったら……その……私と、友達になってくれない？」

「ねえねえシロウ君。今日はどんな事があったの？」

「……………うん。じゃあそのときは、シロウくんに助けてもらおうね。約束だよ？」

————— 1998年6月。俺に、親友ができた。

英国のウェールズ地方。そのとある山奥に、魔法使いが住む村があった。

「今日の授業は”呪い”についてです。

皆は呪いがどういうものかある程度知ってると思うけど、呪いについて正しい知識を知っておき、それに安全に対処するための大切な授業です。しっかりと聞くようにね」

そこには魔法使いとなるべく勉学に励む子供達の姿。
その学び舎を「メルディアナ魔法学校」という。

「えー、私たちは普段魔法を使う際、精霊の力を借りることが多くあります。そしてそれと同じように、呪いにも精霊が関係する術式があります」

しかしその中に異質な者が1人いた。小学生程度の歳のクラスの中で、この場にそぐわない、中学生ほどの年齢の少年。

「あまりに強大な呪いを解呪するために、呪いの精霊を”騙す”という手法もあります。ただしその場合………注意しなければいけないことは何でしょうか？」

——はい、シロウ君」

シロウと呼ばれた赤髪の少年が返事をして立ち上がる。

「はい。その場合、解呪は一時的な効果しか得られないことがほとんどです」

「はいそうですね。よくできました」

士郎は内心 溜め息をつきながら再び席に着いた。

（「よくできました」って、小学生じゃないんだから………）

近衛士郎（14歳）。ひよんな事から魔法を目撃し、魔法使いを志した少年。

実の両親と家族に先立たれ、親戚に引き取られたという過去を持つ。

義理の祖父・近衛近右衛門は魔法使い。しかし彼は自ら孫に魔法を教えることはせず、士郎はこの学校へ送られた。

お陰で今、士郎は年下だらけの学校で勉強するハメになっている。幸い人間関係に不満はない。その年齢のために最初は学校で浮いていたが、士郎の持つ生来のお人好しと人助け精神によって年下のク

ラスメイト達とは仲良くさせてもらっている。

（おじいちゃんが魔法を教えなければいいのに。そうすれば必死に英語の勉強する必要も、麻帆良を離れる必要もなかったのになあ……）

しかし魔法が学べるのはありがたい。士郎は入学2年目の授業に再び集中し始めた。



放課後。大概の生徒は授業を終えてすぐ帰路に就く。この村は山奥に存在し、生活に最低限必要なもの以外は何もない。当然娯楽施設などがあるわけはなく、学校が終われば友達と遊ぶか勉強や課題をする、もしくは家の手伝いをする以外にないのである。

しかし今のメルディアナには、それに当て嵌まらない数人の生徒が存在した。

村の丘、雑草が茂る平原に2人の少年少女がいた。

少年は星の飾りがついた杖を手に、少女はそんな少年を見つめなが

ら座り込んでいた。

「プラクテ・ビギ・ナル。……え」と

「ネギー、今日は早く帰るって言ったじゃない。早く行こうよー」

「もうちょっと…『闇を切り裂く一条の光。我が手に宿りて』……」

士郎の赤い髪より鮮やかな赤髪の少年が何かをしている。

フルグラティオー

「白き————わあっ!!」

——バシィッ!

「きゃあっ!?!」

少年の掌から閃光が走り、辺りを一瞬白い光で染め上げた。だがどうやら失敗らしい。

光を出した少年は反動でひっくり返っている。

「ネ、ネギー! 大丈夫!?!」

「……………失敗しちゃった」

そう呟くと彼はむくりと立ち上がり、再び杖を構える。

「……………ネギー?」

「もう1回」

——ビキッ。

「このポケネギー——ッ!!」

危ないじゃないのケガしたらどうす

るのよ!!

ホラさっさと帰るわよ!! 今のことネカネお姉ちゃんに言いつけるからね!!」

「ええっ!? ちょっと待ってアーニヤ、お姉ちゃんには黙って——」

「うるさ——い!! もう怒った、あんたはいつも無茶ばかりして! 今度という今度は——」

ぎゃーぎゃーと騒いでいる少年少女の名は

ネギ・スプリングフィールドとアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。

スプリングフィールド。それは十数年前に世界を救った英雄の名前。ネギはその人物の実子であり、英雄の子として周囲に期待されている。

しかしその血脈ゆえに彼は「悲劇」に遭い、戦闘用呪文の習得に明け暮れる、およそ子供らしくない生活を送っていた。

そんな幼馴染みの面倒を見るのは専ら彼女、アーニヤの役目。力づくで練習を中断させられ、ネギはずるずると彼女に引き摺られていった。

「……………今日も平和だなあ」

微笑ましい様子を視界に収め、士郎はいつも通りある場所へ足に向けた。



メルディアナ魔法学校を擁する山村。

その中に立つ屋敷のひとつに、数年前から新たな住人が住み着いた。それは病弱な女の子で、自然の中で養生する為にやって来たのだという。名前を――

――コンコン、ガチャツ

「こんにちは、エレナさ――」

「フシヤアアアアアアアア!!!!」

「ぎゃあああ!?!」

「きゃああああ!?!」

灰色の物体を視界に収めた瞬間、士郎の顔に縦線が刻まれた。

・ ・ ・ ・

「ごめんねシロウ君」

ベッドで上半身だけ起こしている少女が士郎を見る。

ブラウンの目と、腰の辺りまで伸ばした少し癖のある金髪。

申し訳なさそうに士郎に謝っている彼女こそ、この部屋の主エレナ・キャンベル（17歳）だった。

「いやいいよ……エレナさんの所為じゃないし……。で、その猫なに？」

僅かに恨めしさを込めた目で、窓辺に座る灰色の猫を見る。

「さっきアドルフおじ様がいらしてね、私にくださったの♪ デイアナって言うんだって」

「へー、サクストンさんが来てたんだ」

アドルフ・サクストン。メルディアナ校長の知人である初老の魔法使い。

士郎↓校長↓サクストン↓エレナ、という流れで2人は出会った。

『士郎。お主に会ってもらいたい者がいるのだ』

『は、初めまして。私、エレナ・キャンベルって言います……あなたのお名前は？』

幼い頃から病弱だったエレナは友人らしい友人がいなかった、とい

うのは後で聞かされた。始めからその為に引き合わされたのだと士郎は気づいたが、だからといって彼女と距離を置く理由もなかった。

『ねえねえシロウくん。今日はどんな事があったの？』

以来、エレナと士郎は友達になった。歳が離れているため姉弟のようだと言う者もいる。

2人がすることと言えば、士郎が外での出来事を話すだけだったがそれで充分だった。

そして士郎が今日も今日とて彼女の部屋を訪ねてみれば。
灰色の猫に見敵必殺とばかりに顔を引っ掻かれた。

その張本人といえば、窓際に座って後足で頭を掻いている。

(何なんだこのヤロウ……………!!)

そんな意思を込めて士郎が視線を送ると。

「……………フツ…」

鼻で笑わ…いや晒われた。なんかむかつく。

「おいでディアナ。よしよし、いい子」

エレナが呼ぶと、ディアナはすぐにベッドに上って彼女の膝上に座り込む。頭から背中を撫でられ、気持ちよさそうに銀色の目を閉じた。

(やっぱ猫だな)

そんなことを思った途端、ジロリと猫の視線が士郎に向いた。

(ッ!？ こやつ心でも読んでいるのか…!？)

「……シロウくん」

マズイツ呆れられた!？ くだらない思考を彼女に読まれたかと思
った士郎だったが……その考えは頭の外へ押しやられる。
エレナの表情には、隠しようのない陰があった。

「なにか……あつたのかな」

聞き逃してしまいそうなほど頼りない声でエレナが言う。要領を得
ない質問だが、答えない訳にはいかない。答えなければいけない。
訊かなければいけない、そんな気がした。

「何かって……何が？」

俯いて目を伏せ、ディアナを撫でる手を動かしながら彼女は続けた。

「おじ様がね……すごく、怖い顔してたんだ。隠そうとしてたみ
たいけど私にはわかる。だって私のおじいちゃんみたいないひとだ
もの」

『エレナ、この猫はディアナという。君の新しい友達だ』

『——きっとお前を守ってくれる』

「……”守ってくれる”…。きっと何かあったのよ。おじさまはいつもそう。いつも自分だけで済ませちゃうの」

俺にはよくわからない…だが、あの人をよく知るエレナさんが言うのならそうなんだろう。

”何かが起きようとしている”。

「——怖い？」

「………怖いよ。すごく嫌な予感がする。もう…誰にも会えなくなっちゃうような気がする」

「そんなことあるわけない」「大げさだ」とは言えなかった。彼女の纏う暗い不安が、俺の口を縫い付けて動きを止める。

——駄目だ、そんな顔しないでくれ。何か言えよ俺の口……!!

「—————!。」

苛立ちを含んだような視線が俺を射抜く。それを辿った先には——銀灰色の双眸が、じっと自分をみつめていた。

(——ディア、ナ……?)

“早く言葉をかけてやれ。友人だろう”

眼が、そう言っていた。

「大丈夫だよ」

「……え？」

「きっと、大丈夫」

わけがわからない、といった目で彼女は俺を見る。

確かに俺の言葉には何の根拠もない、そしてこれから言う言葉にも。

「この村には大勢魔法使いがいる。校長だって、ドネットさんだって、今ならサクストンさんだっている。それに……俺もいる」

でもいいだろう？　少しくらい見栄を張ったって。

「本当に：エレナさんの身に何か起きるんだとしても、俺が守るよ」

「俺が、エレナさんを護るから」

「……………うん。じゃあそのときは、シロウくんに助けてもらおうね。」

約束だよ？」

「ああ、約束だ」

凄く綺麗な笑顔で笑った彼女に少しだけ見惚れた後。俺達は可笑しくなって笑い合った。

彼女を元気づけるためだけの、冗談のような約束。

それが試される日が来るなんて俺は、思いもしなかったんだ――――
――。



時間は過ぎて12月25日、クリスマス。

日は沈み夜の帳は落ち切った。石畳の上に立つ街灯と月明かりが辺りを照らし、しんと降り続く雪が薄っすらと地面に積り始める。

「……………」

もうすぐ夕食の時間だと思って台所のドアを開けて数秒間、呆然とせざるを得なかった。

ドアを開けた士郎の目の前で、アラサーの女性が年甲斐もなくハシヤいである。

よく見ると玄関に普段見慣れない革靴が置いてある。士郎はようやく眼前の事態が把握できた。

「ああ…おじさんが帰って来たんですか」

「そうなのより！ まったくあの人ったら仕事仕事って何ヶ月も私のこと放っておいて、ホントヒドイわよね〜♪」

愚痴すら幸せいっぱいだった。

士郎の祖父・近右衛門とメルディアナの校長は友人で、その繋がりで下宿先として紹介してもらったのがここネヴィル家である。

魔法具などマジックアイテムを作る職人「魔具師」であるバートランド・ネヴィル氏と、その妻ドナ・ネヴィルの夫妻が士郎の現在の保護者である。

士郎がおじさんと呼ぶネヴィル氏は旧世界・新世界問わず仕事で飛び回っているためにほとんど家に帰って来ない。だからいま夫人はこんなにゴキゲンなのだ。

「さくって今日のお夕飯は御馳走よー！？」

踊るように調理するドナ。士郎は彼女が手に持った包丁が怖くて仕

方なかった。

「やあ士郎、帰って来たのかい」

声の主は、赤茶けたボサボサ髪とそれと同色の目を持つ男性。自宅だからだろうが、服もだらしない着こなしをしている。

彼こそが話題の人、この家の家主・バートランド・ネヴィルだ。

「おかえりなさいおじさん。で、ただいま」

「ああ、おかえり」

彼は士郎のような人懐っこい笑みを返した。



夜になったことに加えて冬休みであるメルディアナ魔法学校。その校長室に、ある客人が訪れていた。

「久しいなアドルフ。息災で何よりだ」

校長にアドルフと呼ばれた初老の男は 僅かに口の端を上げて応えた。

アドルフ・サクストン。かつてエレナの祖父の「魔法使いの従者」ミニステル・マギであり、同時に親友だった人物だった。

「校長もお元気で。それであの子は……いや、あの子達はどうですか？」

「あの子らも息災だ、儼らなどより余程な。仲も良い、まるで姉弟のようで微笑ましい。」

——してアドルフ、何用で来た。亡き親友の孫娘の顔を見に来た……だけならば良いのだがな」

アドルフの眉間に皺が寄る。それは苦悶の表情だった。

「その通りです校長。実は……」 奴” が生きて……ここに向かっているかもしれません」

校長が目を見開いた。

「……奴……じゃと？ 確かか？ アレはお前の親友が、サイラスが命と引き換えに——」

「10年前、奴と戦った私には解る……」 奴” です。間違いない……！」

確信に満ちたサクストンの言葉に、校長が黙りこむ。

2人の間には重い空気が流れ、重い沈黙が部屋を支配した。



「……………ごちそうさまでした」

「ああ、美味しかったよドナ」

「うふふ♪ お粗末様でした♪」

士郎はゲップが出そうになるのを必死に堪える。とてつもなく大量の食事だった。夫人、夫が帰って来たからって頑張り過ぎである。しかしそれを何食わぬ顔で完食して笑ってみせる辺り、旦那の方も妻への愛が溢れている……………のか？

「2人とも、何とデザートもあるのよ♪」

「おっ、それはいいね！ 一体何かな？」

「……………うぷ」

《—————。》

「……………？」

「？ どうかしたかい士郎？」

「いや…何か変な感じがしたっていうか…誰かに呼ばれた？ ような。……気の所為かな」

《気の所為などではない》

「へ？」

ダイニングキッチンの面々が部屋のドアを凝視する。
今、明らかにこの家の者ではない声がした。

《……………何処を見ている……………此処だ》

「「「え」」」

よく見るとドアが僅かに開いており、そこには1匹の猫がいた。
だがその猫、士郎には見覚えがある。

「——ディアナ!？」

士郎は思わず叫んで近寄った。何故なら……………その灰色の体が、血まみれだったから。

《ええい…私に触れるな小僧! 怪我など……………今はどうでもよい……………!!》

「!?!? しゃ、しゃべつ——」

「……………猫の妖精か?」

《その…通りだ この家の主よ。誰でもよい……………伝えてくれ。あの娘が……………エレナが……………》

そのまま、ディアナは糸が切れたように崩れ落ちた。

「エレナ? 士郎の友達の、あのエレナちゃんか?」

「…………あなた、これ只事じゃないわ。校長先生に連絡して——シロウ!？」

ドアを突き破るような勢いで、士郎は雪の降る中を駆けて行った。



この世界には、吸血鬼が2種類いる。

失われた術法によって人間が吸血鬼へと変じた、「ハイデイライトウォーカー」。

「真祖の吸血鬼」。

そして「そうではない吸血鬼」。幻想の存在である神造異界の住人、魔法世界人。

後者の吸血鬼である人物と、とある人間の間にも生まれたのが「彼」だった。

血の為に、欲望のまま人を襲い続け、魔法世界で多額の懸賞金をかけられた。

遂にはゲートを密航して旧世界へ逃亡。さらに人を襲い続けた。

そして現在より10年前。

その人物はとある魔法使いと相討ちとなって死亡。
魔法使いは死後、本国より「偉大な魔法使い《マギステル・マギ》」
の勲章を贈られた。

だが彼——吸血鬼は生きていた。

力の源である血液を大量に失血し、激しく弱体化しても尚、地を這い蹲るようにして生きていた。

息を潜めるような生活を続けた。

見つからぬよう、感づかぬように人を襲い、魔力の回復に必死に努めた。

「独学ながら魔法の知識も手に入れた、むしろ過去の私を超えたかもしれないな」

だが恨みは忘れていない。私を討ち倒した魔法使い『サイラス・キヤンベル』。

しかし彼は私との戦いで死去してしまったのだという。

「——ならば、彼の血縁を狙うだけ」

サイラスの血を色濃く受け継ぐ孫娘がいるという。

その娘は病弱で、現在とある山奥で養生していると聞いた。

探し出すのが面倒だと思っていれば、偶然見つけた彼——サイラ

スの親友にして相棒、アドルフ・サクストンが妙な動きを見せていた。

もしかと思って後をつけてみれば。

——『エレナ・キャンベル』。

私の目の前に彼女がいる。

ベッドで上半身だけ起こして本を読んでいる可憐な少女。

「……………どちら様？」

相変わらずだなサクストン。君はいつも大事な所でヘマをする。君は常にサイラスの足を引っ張ってきた。今回に限っては彼の孫娘さえも巻き込んで。

…いや、今回は私の幸運——彼女の不運によるものかな？

「初めましてお嬢さん。申し訳ないが——その血を『いただきます』」



「ゼエツ、ハアツ………!!」

屋敷の廊下を走る。全力で走る、走る。

息が切れても、肺が悲鳴を上げても。

士郎は箒に乗れないため、家からずっと走って来た。とつくに限界など超えている。

だが止まるわけにはいかない。友達に危険が迫っているかもしれないのだ。

その予感確信に変わっている。士郎が走る先々で屋敷の使用人が倒れている。

気絶しているだけだと思われるが、何か起きていることは疑いようがない。

そして——最後の、扉。

「——エレナさんッ!!」

扉をブチ破る。

「——おや。ノックもせずにレディの部屋に入って来るとはマナーがなっていないね」

目の前に、黒い——黒い男が立っていた。
黒いシャツ、黒いネクタイ。黒いスーツに黒い革靴、黒いコート。
肩口までのびる、湿っているように脂ぎった天然パーマの黒髪。
黒くないのは、病的なまでに白い肌と紅い瞳だけだった。

そして。男の足元には

(……何で。何でエレナさんが倒れてる?)

文字通り、血の気の無い肌の色をしたエレナが倒れていた。

(——何をされた?)

首筋に残る斑点のような傷から、血が滴り落ちている。

——誰に。

「お前——!!!!」

激昂して男に駆けだした。

「プラクテ・ビギ・ナル！ 火の精霊17柱、集い来たりて敵を射て——！！」

「『魔法の射手・闇の19矢』」

「————がっ!？」

——速い。後から呪文を唱え始めた男は容易く士郎の呪文詠唱を追い越した。

全身に魔法の矢を受けた士郎はその場に倒れ込む。ほとんどが掠り傷だったが……左腕、左脚、そして脇腹を矢が貫通した。

間違いなく重傷だ。噴きだした鮮血が辺りに血溜まりを作っていく。士郎は這い蹲るように床に伏して吐血した。

「がっふ……あ……げはっ!!」

だが————まだだ……!!

「ほう。その傷でまだ敵を睨みつける気力があるとは。こんな山奥の、平和ボケした魔法使い……いや、魔法使い以下の子供が」

(……………当たり前だ)

《其処は地獄。または煉獄。或いは魂を灼く鍊鉄場。》

（あの地獄を生き延びた——この程度でビビる程ヤワじゃない……！）

「……君に興味が湧いてきたが、生憎と私は暇ではない。グズグズしていたら魔法使い共が集まって来てしまう。さらばだ少年。じつとしていれば失血前に助けが来るだろう。その命、大事にしたまえよ」

「……………は……………？」

——コイツは今、何と言った。

『さらば、だと？』

……おい、待てよ。巫山戯るな。

————逃げんな——！

好き勝手やっておいて————後はさっさと逃げるのか！……！！

「ふざけんな、こんちくしょう………！！」

傷の痛みに耐えながら絞り出したその声は、立ち去る男に届かない。尚も声を張り上げようとするが——痛みと失血で視界が歪む。体は当然動かない。

意識が、徐々に薄れていく。

（くそっ———待てよ………！！）

『うん。もし何かあったらシロウ君に助けてもらうね。約束よ？』

約束は守れなかった。会話の流れで言った、冗談みたいな約束だったけど。

——それでも、俺は——！！！！！！

《——ゴォン！！——》

錆び色の大地。乱立する無窮の剣。空を染める黄昏。宙で軋む歯車。

世界。根源の渦。英霊の座。とある英霊の心象風景。

——其処は、「剣の丘」。

その丘に、たった独りで立つのは。

「理想に溺れて溺死でもしたか？ 衛宮士郎」

《おまけ》

「士郎、エレナの部屋を訪問する。の巻Ver. 25, 5」

——コンコン、ガチャツ

「こんにちは、エレナさ——」

いつも通りノックして——返事を聞かずに——ドアを開けて、絶句した。

部屋に居たのは2人の女性。1人は黒いドレスにフリルの付いた白いエプロンを着ている、いわゆるメイドさん。そしてもう1人は。

「ひゃあっ!?! シッシロウ君っ!?!」

下着姿のエレナさんでした。上下ともに色は白——

——ズガンッッ!!

「へ」

開けたばかりの部屋のドアに、投擲用ナイフが見事に突き刺さっていた。そして士郎の頬には一条の傷が刻まれ血が滴っている。

「お嬢様のお身体を堂々と覗き見るなこの下郎ッ！ このゲスが下衆が！ 下種がッ！
貴方を、万死に値するッ!!」

咄嗟にドアを閉めた直後、向こう側からズガガガガガガガガガガガガガガ!! という轟音が聞こえてきたのは気の所為だと思いたい士郎くんであった。

《おまけ2》

「マジカルアンバー？ いいえ私はルビーです。の巻」

「あはー♪ 私サファイアちゃんの同僚が申し訳ありませんシロウ様」
「どわあっ!?! (ビクッ!!)」

気配を全く感じさせずに、1人のメイドが士郎の右に立っていた。エレナ付き侍女メイドのひとり、ルビー・フェアマン。

「あの子はお嬢様のことになると思の色が変わっちゃうんですよ、でも普段はとってもいい娘なんですよ？」

「は、はあ」

申し訳なさそうな笑顔で謝ってくる彼女を見て、何故か士郎は不安に駆られた。

笑顔の裏に、いや彼女の後ろに「割烹着を着た悪魔がいるような気がする」などという自分でもわけのわからない焦燥。

思わず一歩後退る。

(……怖い。なんか怖い。害意はないのに悪意に満ちてるとかそんな気がする!?)

そんな士郎の内心を知ってか知らずか、逃がさんとはかりにルビーは士郎に一歩近づく。

先程までとは違う種類の笑みを浮かべて。

「それでえ……。お嬢様のお身体を拝見したご感想はどうですか？多少クセはありますが、絹糸のような金糸の髪！

あのシミひとつなく白い、艶のある肌！ 瑞々しい太腿！

清純ながら色香に満ちたうなじ、鎖骨！ くびれ！ 足首！

あどけなく愛らしいお顔！ 赤く染まる唇！！ どうですかシロウ様！？ もうドキッとしちゃったとかクラッときちゃったとか興奮しちゃったとか押し倒したいと思っちゃったとかキヤ~~~~！！シロウ様ったらそんな大胆な〜♪」

「おっ思ってませんよそんなこと!!!」

——ギィィ…………。

地獄の扉が、開いた音だった。

——ドアの向こうには。

顔を真っ赤にして俯くエレナさんと、こちらを怨嗟の籠もった眼で射ぬくメイドさんの姿があった。

ええそりゃまあさっきの会話（というカルビーさんの声）は当然聞こえているでしょうねえ大声だったんだからそしてルビーさんは満面の笑みで吊り上がる口を手で隠してくすくすとお笑いになられておる……………嵌められた。

ドアの向こうから、もう一人のエレナ付き侍女サファイア・モーランがナイフを両手いっぱいに構えている。排除すべき害虫をSAT SUGAIすべく。

（ああ……………死んだなこれ。ははっ）

《いいから走れ！そのような泣き事聞く耳もたん！！》

そんな幻聴が聞こえていなければ、俺はあそこで死んでいただろうと思います。まる。

一 4話 英国編 平穩を奪う闇（後書き）

《ボツ文章・あるいはI Fルート》

「……」守ってくれる”。きっと何かあったのよ。おじさまはいつもそう。いつも自分だけで済ませちゃうの」

俺にはよくわからない……。だが、あの人をよく知るエレナさんが言うのならそうなんだろう。

”何かが起きようとしている”。

「そういう所はシロウくんも同じね」

「……いや、なんでさ」

思わず反論すると、彼女はクスリと笑う。

「だってそっくりじゃない。君は——……貴方はきっと、そういう道を進むことになる。私にはわかるの」

困ったような、悲しそうな笑みを浮かべる彼女を見て、士郎は何も言えなかった。

（補足・解説）

…平穩を奪う闇
ヴァイジター

「ヴィジター」Ⅱ 「来訪者」。

…ネギ・スプリングフィールドとアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。

この時のネギはメルディアナ魔法学校一年生、アーニャは二年生です。

…校長

メルディアナ魔法学校校長。彼の魔法使いの従者であるドネットさんの登場予定はありません。

…そして「そうではない吸血鬼」。幻想の存在である神造異界の住人、魔法世界人。

捏造設定。多分こうなんだろうなあって想像で作ったものです。

…英国編オリジナルキャラクター

エレナ・キャンベル

17歳の少女。少しクセのある金髪を腰まで伸ばしている。瞳の色はブラウン。

祖父譲りの膨大な魔力と才能を持つが、生まれつき病弱な為にならず、士郎が初めての友達。

ロンドンの実家（金持ち）に祖母、父母、そして10歳の妹がいる。

アドルフ・サクストン

灰色の髪をした初老の男性。瞳の色は青みがかった灰色。

魔法使いで、エレナの祖父の親友で彼の魔法使いの従者だった。

その親友の死に負い目を感じており、忘れ形見であるエレナを守ってきた。

校長の知人。

ディアナ

女神の名前を持つ、灰色の毛並みと銀灰色の瞳の猫。性別はメス。オコジョ妖精と並んで由緒正しい猫^{ケット・シー}の妖精。

元はアドルフの使い魔だったが、エレナに迫る危険を感じて彼女を守るためエレナの飼い猫となった。

士郎が初対面の時に引っ掻かれたのはディアナが士郎を警戒したため。

ネヴィル夫妻

結婚して数年経つのに、一緒にいると今でもバカップルの如くイチャイチャする歩く公害。

そんなバートランド氏のドナへの接し方を見て過ごしたため、士郎の女性の扱いは多分にこの一家の影響を受けていたりする。

吸血鬼

この吸血鬼の名前は後々に登場する予定です。それまではいちいち「吸血鬼」と呼称します。

ルビー・フェアマン&サファイア・モーラン

エレナ付き侍女の2人。←にも解説あり。

…——貴方を、万死に値するッ!!

…あは〜♪

某屋敷の某メイド双子姉妹とは別人。ていうかこれが翡翠さんだったら性格違い過ぎるw

平行世界の人物というわけでもない。姉妹じゃないし。あくまで他人の空似でそっくりさん。しかも外見は全くの別人・性格だけ似てるという設定。

ていうか「おまけ」でのお遊びなのでそこまでちゃんと考えてないですw

それでは次回！！

一3話 英国編 《剣の丘》（前書き）

修正・加筆はありますが、基本的に改訂前と変わりません。

改訂前を知る読者様は読み飛ばしていただいてもノープロブレム。
ただし次話は以前と展開が違いますのでご注意ください。

それでは「一3話 《剣の丘》ブレイドハイト」、どうぞ！

一3話 英国編 《剣の丘》

マイナス
一3話 英国編 《剣の丘》
ブレイドハイト

《————ゴォン!!——》

————歯車が浮いていた。

黄昏という言葉が想起される夕焼けの空。

そこに、幾つもの歯車が浮いていた。

ああ、なんて懐かしい――

「え？」

懐かしいだって？

俺は、此処を知っている――？

ガバッとその場で起き上がり――

剣。

剣が在った。

短剣、長剣、小剣、大剣、石剣、銅剣、片手剣、両手剣、西洋剣、
騎士剣、斧剣、鎌剣、
錘剣、双剣、湾刀、和刀、野太刀、小太刀、夫婦剣、霊剣、聖剣、
魔剣、破魔剣、妖刀、
神刀、神剣。

あらゆる剣が其処にはあった。

砂塵が舞う錆び色の大地に、墓標のように突き刺さる無窮の剣。

――そして。

赤い外套を着た男が、こちらを向いて立っていた。

「……………随分とボロボロなようだが、平気なのか？」

言われて気づいた。そうだ、俺は怪我をしていた筈なのに……………傷が、治っていた。

服は血だらけのままだったが。

「……………安心するな。見たところ塞がっているだけのようだ。此処はあらゆる剣を構成する要素で満ちている。それがお前の傷を塞いだのだろう」

（……………？）

「なに言ってるんだ？　それじゃ俺がまるで剣みたいじゃないか」

そう言うとその男は、面白いものでも見るような目で言った。

「クッ……『衛宮士郎』^{おまえ}の口からそんな言葉が出るとはな。どうやらお前はまだ、自分が何なのか理解していないようだ」

「は？」

「まあいい、こちらの用件をさっさと済ませてしまおう。お前はともかく女性^{レディ}を待たせておくわけにはいかないのね。それにハッキリ言って、お前に此処に居られるのは迷惑だ。

——さて、ついて来れるか？」

何を言って、と口を開こうとして

コトバが、紡がれた。

I am the bone of my sword.

「——体は剣で出来ている」

黒い太陽。ソコから溢れる黒い泥。呪いの炎。

周りには人——いや、ヒトだったモノ。

家族も友人も知人も他人も生きながら焼けていく。

家も公園も学校も思い出の場所も、少年の生まれ育った場所が燃え

ていく。

大地も空も空気をも焦がし、それでも炎は命を喰らう。

まだ喰い足りぬと炎は勢いを増していく。

助けを乞う声を振り切って、必死に自分の命を守った少年の心も。

――灰になって燃え尽きた。

そして。

『……………ああ、よかった』

助けられ。救われ。そして……………あこがれた呪われた。

S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s m
y b l o o d .

「血潮は鉄で、心は硝子」

『——うん。初めに言っておくとね、僕は魔法使いなのだ』

『いいかい士郎。君の投影は、絶対誰にも見せちゃいけないよ』

『何を言ってるんだ士郎！ 男はカワイイ女の子のために頑張るものなんだ！』

……あれ？ 大河ちゃん？ 何をそんなに怒ってるんだい？』

『……………士郎、女の子を怒らせちゃいけないよ。後で損するからね』

『僕は、正義の味方になりたかった』

『……………ああ——安心した』

I have created over a thousand blades.

「幾たびの戦場を越えて不敗」

『おはようございます、先輩。もう藤村先生来ちゃいますよ？』

『しーろ——う！——朝あさごはん——っ！——！』

『おっす衛宮！ で、どうだ？ そろそろ弓が恋しくなったか？』

『いつもスマンな衛宮。ところで…実はまた、生徒会室のエアコンが……………』

『よう衛宮。お人好しのお前に頼みたいことがあるんだけど別にイイよな？』

Unknown to Death,

「ただの一度も敗走はなく、

『問おう、貴方が私のマスターか』

『衛宮くん。どういふことかキッチリ説明してもらおうわよ？』

『喜べ少年。君の願いはようやく叶う』

『こんばんわ、お兄ちゃん』

『——聖杯は欲しい。けれど、シロウは殺せない』

『判らぬか、下郎。そのような物より、私はシロウが欲しいと言ったのだ』

『——やっと気づいた。シロウは、私の鞘だったのですね』

『シロウ——貴方を、愛している』

“——契約しよう。我が死後を預ける。その報酬を、ここに貰い受けたい”

N o r k n o w n t o L i f e .
ただの一度も理解されない」

『殺して、殺して、殺し尽くした。己の理想を貫くために多くを殺し、無関係な人間の命なぞどうでもよくなるぐらい殺して、殺した数の数千倍もの人間を救った』

『そのうちにそれにも慣れてきてね、理想を守るために理想に反し続けた。』

自分が助けようとした人間しか救わず、敵対した者は速やかに皆殺しにした』

『犠牲になる“誰か”を容認する事で、かつての理想を守り続けた』

——みんなを助ける、正義の味方になる

——だって仕方がないだろう。何を救おうと、救われない人間というモノは出てきてしまう

『そんなことを何度繰り返したか……分からないんだセイバー』

『——そら。そんな男は、今のうちに死んだ方が世の為と思わないか?』

Have withstood pain to create
many weapons.

「彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う」

『……………じゃない』

『……………なんかじゃ、ない……………!』

『……………間違い、なんかじゃない……………!』

『——決して、間違いなんかじゃないんだから……………!』

『俺の勝ちだ……アーチャー』

『——ああ。そして、私の敗北だ』

“ それでも——俺は、間違えてなどいなかった——”

『私を頼む。知っての通り頼りないやつだから——君が、支えてやってくれ』

『うん、わかってる。わたし、頑張るから。アンタみたいに捻くれたヤツにならないように頑張るから。きっと、あいつが自分を好きになれるように頑張るから……！

だからアンタも——』

『大丈夫だよ遠坂。答えは得た。俺も、これから頑張っていくから』

Yet, those hands will never hold anything.

「故に、生涯に意味はなく」

あの日俺を見送ってくれた君の笑顔は

あの日とは違うものである今の俺の中にも。

たしかに残っているはずなんだ。

だからいつか俺よ。

その笑顔がもつ意味を思い出して欲しい。

S o a s I p r a y, " u n l i m i t e d
b l a d e W o r k s".

「————その体は、きっと剣で出来ていた。」

——脳が沸騰する。

鮮明な映像が、音が、匂いが、感触が記憶が経験が”魂に”流れ込む。刻み込まれる。

——脳が焼き切れる。

膨大な情報量に脳が悲鳴をあげる。

——吐き気がする。

衛宮士郎の殺戮に。英霊エミヤの殺戮に。

そして理解した。

——彼は、俺なのだ。

「——よく耐えた。これでお前には戦うチカラが備わった：元居た場所へ帰るがいい。……まったく、姉弟揃って”英霊の座”に迷い込むなど誰が予想出来るのか。少なくとも私に非はないな」

薄れゆく意識の中——近衛士郎は世界に帰る。

— 3話 英国編 《剣の丘》（後書き）

近衛士郎が去った後、剣の丘に残されたのは。

赤い外套を羽織った、白髪に浅黒い肌の男、と——
雪のように真っ白な肌と、輝く銀色の髪。血のように紅い瞳を持つ
少女が男の背に隠れて立っていた。

「ありがとうシロウ」

「……私は君の弟とは別人だと何度言ったらわかるのかね？」

「もう、ホントにシロウは素直じゃないんだから！ こういうときは
素直にお礼を受け取ればいいのよっ」

少女は声を荒げるが、その声色と表情は楽しげだ。
対する男は無言で苦笑している。この場所で既に何度も繰り返され
た遣り取りだ。

この少女には勝てないと、彼は既に諦めていた。

この剣の丘に雪の少女が舞い降りたとき、彼は我が目を疑った。
彼女から話を聞いて、彼はさらに混乱した。

だがいくら考えても詮無いこと、彼は諦めて現実を受け入れること
にした。

剣しかない孤独な世界に、住人がひとり増えた。

どれくらいの時間が経ったか、ある時。血だらけの少年が迷い込ん

だ。

その少年は少女の弟であり、男と元を同じとする存在だった。狼狽える少女を制し、男は少年に近寄る。

生きている。何故か傷は塞がっている”だけ”の状態だった。

そして少年は何事か呟いた。

「……………護るんだ、俺が……………。——約束、したんだ、か……………」

少年は誰かの為に戦い、傷ついたらしい。

平行世界だろうが異世界だろうが、「衛宮士郎」は人助けをする性分らしい。

男はそう、思った。

「士郎ったら、小っちゃい頃と全然変わってないのね。ケガしちゃういけませんって、何度、言ったら、判るのかしら……………」

少女が泣きそうな声で呟く。

「どうせこれからも、危ないコトを続けるんでしょ……………」

少女は男に顔を向ける。

彼女が言いたいことは、目を見るだけで伝わってきた。

“ならばせめて。弟が死ぬことのないように。彼に……………「戦う力」。”

「……………これで良かったのかね？」

青年は己の記憶を通して少年に全てを与えた。

魔術、戦術、戦闘技術、戦闘経験。そして心象世界の剣たち。^{ツバキ}

要らぬ重荷も背負わせてしまったのではないかと男は思考する。

「いいの。お姉ちゃんの言うことをきかない弟には、それくらいの罰^{バチ}が丁度いいわ」

そう言って少女は笑う。

その表情は自分の知り合いにそっくりだと、男も密かに笑う。

其処は剣の丘。とある英霊の心象世界。

いつまで私／彼女が英霊^{こいし}の座に居られるのかわからないけれど。

———別^{その}れのとしまで、一緒に／共にいよう。

衛宮イリヤスフィールと英霊エミヤ。少年を見守る者が、ここに二人。

一 2話 英国編 降り頻るは紅蓮の鉄錆（前書き）

……そろそろ息切れしてきました。

予約投稿機能を使っている投稿設定をしているのですが……

設定話1、2、3、一5話、一4話、一3話、一2話……流石に一気に投稿は疲れます。

さてと愚痴はここまでにして……それではいきましょう。

「一2話 降り頻るは紅蓮の鉄錆ブラッド・スノウ」、どうぞ！
……ハア。

一 2 話 英国編 降り頼るは紅蓮の鉄鎧

「――失礼する」

「!? こ、校長! それにそちらのお方は……?」

ドナは困惑しながら2人を招き入れる。ネヴィル夫妻の家の玄関を乱暴に叩いたのは校長とアドルフ。そのまま2人は上がり込んで家主と一匹の猫の前にやってくる。

「お久しぶりです校長。ディアナはこちらです。それで、何が起きているのですか?」

「話が早いなバートランド。詳しい話は彼がしてくれる」

校長の視線の先で、アドルフがディアナの前に屈みこんでいた。

「何があったディアナ!」

《すまんアドルフ……時間稼ぎも連絡も出来なかった……お前の所まで行くことも出来ず、ここで力尽きたのだ……。まさか、あの小僧の家だとは》

「何があったと訊いているのだ!!」

アドルフが声を張り上げる。それを見て、躊躇うように一度彼から目を逸らして――ディアナは再び銀の瞳をアドルフに向けた。

《——奴だ。” コーンフィールド”だ》

その名を聞いた瞬間、アドルフと校長の顔色が変わったのを、ドナは見逃さなかった。



——イメージしろ。

現実で敵わない相手ならば想像の中で勝て。
自身が勝てないのなら勝てるものを幻想しろ。

二十七の撃鉄よ、上がれ。魔力よ奔れ。
このボロボロの身体にもう一度、立ち上がる力を。寄越せ。

「————トレース・オン 同調開始」

マイナス
— 2 話 英国編 降り頻るは紅蓮の鉄鎧

『――――トレース・オン
同調開始』

「……………む？」

気の所為か、後ろから声が聞こえた。いま吸血鬼――彼の後ろにいるのは死にかけの少年1人。到底そんな声を出す余力はないはず。訝しみながらも彼が後ろを振り返ると――

直後。彼はその行為を後悔した。

全身に突き刺さる――――氷のように、冷たい、殺気。

吸血鬼は、無限の剣に貫かれる己の姿を幻視した。

「――――な」

痛い。痛い。痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

それが眼前の敵を見逃す理由にはなり得ない。

———投影開始。

集中しろ。イメージしろ。己の裡の設計図を探し出せ。

潜る。潜る。己の心へ、心象世界へ。敵を滅ぼしうる幻想を検索する。

剣の丘の中心から———その剣を引き抜いた。

「^{トレース・オフ}投影、完了」

紺青の装飾踊る黄金の西洋剣が、士郎の手中に顕れる。

「殺るだけ殺って逃げようなんて…道理が通ると思うなよ……………！」

一歩、士郎が踏み出す。

「……………ッ!!」

剣の放つ輝きが、纏う魔力の奔流が吸血鬼を恐怖させる。

（何だ……何だあの剣は!!
何であんな代物をあんな子供が持っている———!?!）

更に一步、士郎が踏み出す。一步、吸血鬼が後退る。

（マズイ………実にマズイぞ………ここは予定通り 一刻も早くこの場から離れ——）

「——逃げるのか？」

その声が、黒衣の男を縛りつけた。

（……逃げる？）

……冗談ではない。

私は吸血鬼、夜を支配する怪物！！

それが、何故、私が何故、何故、何故、何故あのような小僧から逃げねばならぬのだ！！

吸血鬼が子供に負ける道理など何処にもない！！
わたし

更に一步、士郎が踏み出す。

吸血鬼も一步、前に出た。

「……………」
「……………」

正面から相對して對峙する。互いの眼を見て睨みあう。
2人の距離は6 m。

呪文の詠唱が終わる前に斬り伏せれば士郎が勝つ。
斬りつけられる前に魔法を放てば吸血鬼が勝つ。

撃たれる前に斬るか。斬られる前に撃つか。

(……………)

果てのない静寂は、一瞬で破られた。

——黒衣の男が腕を前に突き出して。

「ヴァロ・ス・ヴァ・ロッサ・ハイレディン！ 闇の精霊19柱・集
い来たりて敵を射て！

『魔法の射手』・連弾・闇の19矢——！！』
サギタ・マギカ セリエス オブスクーリー

闇の19矢が獲物へ向けて収束し加速する。
士郎は微動だにしない。

（やはり傷が障ったか——この戦い、私の勝利——！！）

士郎の口の端が上がった。

「止まったな」

（！！）

己の攻撃を確実に当てるには、敵の動きが止まっている時を狙えばいい。

敵の動きが止まる時。

それは敵が攻撃する直前。攻撃の直後。そして敵が：「勝利を確信した時」。

士郎の体を矢が貫くまであと数瞬、剣を持った右手が動く。

黄金の剣が、担い手の意志に応えて輝きを強くする。

剣を両手で力強く握り締め、闇を払うべく振り上げる——！！

「————『勝利すべき黄金の剣』————！！！」

黄金の斬撃が漆黒の矢を呑み込んで蒸発させる。その煌きは勢いを増し続け——

「ぬううッ——ぬあああああああああああああああ
ああああああ！」

魔法障壁ごと、吸血鬼を斬り裂いた。

『勝利すべき黄金の剣』○

担い手が騎士道を往く限り、あらゆる勝利へ追い風を吹かせる王の
 剣。

そしてこの剣が本来の力を発揮するのは、**伝承が残るここ英国**。ブリテン

伝説が体现されるのなら。

伝説が吸血鬼に——英雄が怪物に敗けることなど有り得ない。

この結果は当然のものであり、戦う前から決まっていたこと。

幾たびの戦場を越えて不敗。

I have created over a thousand blades.

敗ける道理は、何処にも無い。



「ぐあっ……ああ……グアああアアアアあアッ！！！」

刻まれた一条の傷痕、露になった血肉からは鮮血が吹き出している。士郎が未熟だった故か。傷ついた身体では剣を使いこなせなかったのか。

怪物はまだ死んでいなかった。

だが士郎の右腕も、ズタズタに裂かれたように傷ついていた。服は紅く染まっている。

しかしそれは大した問題ではない。今、体中の傷が開いたことに比べれば。

確かなのは——吸血鬼を、殺しきれなかったという事実。敗けはしなかったが、勝つことも出来なかった。

「……………ぐ……………ッ！！！」

——ドサッ……。

音をたててその場に崩れ落ちる。カリバーンの斬撃、その衝撃波で壁が吹き飛び、冷たい外気が部屋の中に入ってくる。冬の風が容赦なく士郎の身体に吹きつけた。

「…………お久しぶりです。アドルフ・サクストン」

(……………?)

霞がかってゆく意識の中、そんな声が耳に入った。

『遅かったか……！ 貴様……エレナに手を出したばかりか……シロウまで』

『…………「シロウ」。そうか、その少年はシロウというのか』

『…そんな事を気にしている余裕があるとは意外だな。貴様はここで死ぬのだぞ?』

『無理ですよ、貴方では。私を殺せるのは…私を滅ぼす権利があるのはその少年だけだ』

『……………どういう意味だ』

『貴方に話す必要はない。……………心して聞けシロウ！まだ意識があるハズだ！』

私が憎ければ、いつか魔法世界まで追って来るがいい。ムンドウス・マギクス

我が名は吸血鬼ボールドウィン・コーンフィールド！

いつか来るその時までこの傷を癒し、君との殺し合いに備えよう！！』

『私が憎ければ追って来なさい……………魔法世界まで』

壁の向こうで降り頻る、白い雪を視界に収めて。士郎の意識は暗転した。



「やあ、起きたかい士郎」

俺のすぐ隣にバートおじさんが座っている。ここは……病室？

「シロウ！ 目が覚めたのね！！」

「……………士郎、状況がわかるかい？」

——！！

「おじさん！！ エレナ…エレナさんはっ……………！！？」

勢いよく上半身を起こす。何故か傷は痛まなかった。魔法で治癒されているのだろうか？

だが今はそんなことどうでもいい。

彼女は、生きているのか。

「ああ。彼女なら昨日まで隣の病室で寝ていたよ。君は2日も眠っ

ていたけどね」

——昨日まで。

「……………それじゃあ……………！」

「死んだよ」

——え？

「ッあなた！！」

「遅かれ早かれ知るんだ。だったら早い方がいい」

——何て言った？

——誰が、どうなったって？

——理解できない。何が、ここは、あの時、何処で、誰が——

「でも…だからって……………！！ ああ、ごめんなさいシロウ……………！！」

ドナお婆さんの胸に抱き締められる。

でも俺の耳にはもう、何も入ってこなかった。



「本当に……ありがとうございました」

——やめろ。

「お嬢様はお身体が弱く、友人らしい友人が1人もおりませんでした。ですが、あなたが屋敷を訪ねるようになってからは………それはもう……生き生きとしておられて………」

——やめてくれ。

「使用人一同からのお礼とともに、僭越ながら……お嬢様の遺言をお伝えしようと参りました」

——俺の所為だ。

「ありがとう、と」

——俺の所為なんだよ。

あるとき。吸血鬼^{あいつ}は戦う気なんてなかった。あの場から去ろうとしていたんだ。
それを勝手に引き止めて、俺は無謀にも戦った。頭に血が上っていたんだ。

そんな時間があれば、エレナさんを医者^{イサナ}の所にでも運べば良かったのに。

一度倒れて、起き上がった後でもそれは出来た。
エレナさんを救えたかもしれない、二度のチャンスを。

——俺は、ドブに捨てたんだ。

『私が憎ければ追って来なさい……………魔法世界まで』

「……………ボールドウィン……………コーンフィールド……………」

その日から。彼の生きる目的は——復讐というベクトルへ向かうことになる。

僅か2年半後、その目的を果たすまで。

一 2話 英国編 降り頻るは紅蓮の鉄鎧（後書き）

〈補足・解説〉

…黄金の斬撃が漆黒の矢を呑み込んで蒸発させる。

はたして公式のカリバーンは斬撃を飛ばすことができるのか！？
わかりません！！

疑問点やお気づきの矛盾点がありましたらバンバン感想にお寄せください。

でも「小説家になろう！」の規則に則った文章でお願いします！

ただの誹謗・中傷みたいにもとれる感想が以前あったんですよチクシヨー！！

その時は10数秒ほど「もう更新やめよっかな……」と本気で考えちゃったくらいシヨックでしたね……。

それでは次回！

—1話 麻帆良編　そこは運命が始まる場所（前書き）

ぶっちゃけ今回のお話は、改訂前の「第五章 麻帆良祭編」に載せた

「番外話 過去編14 麻帆良過去編」そのまんまです。

ですが細部の修正と僅かな加筆がありますので、既読の方がもう一度読んでも（まあまあ）楽しめると思います。

それでは「—1話　そこは運命が始まる場所」、どうぞ！！

—1話 麻帆良編 そこは運命が始まる場所

1998年、12月25日。

『私が憎ければいつか魔法世界^{ムンドウス・マギクス}まで来るがいい。

私は吸血鬼ボールドウィン・コンフィールド!!

いつか来るその時まで^{う!}にこの傷を癒し、君との殺し合いに備えよう!』

『私が憎ければ追って来なさい……………魔法世界まで』

2001年、8月末日。

「……………フ、ハ——ハハハハハハハハハハッ!!!
見事、見事だコノエシロウ! まさかあの少年がここまで成長して来るとは!」

聖剣と摂理の鍵で地面に縫い付けられ、脱出も再生も出来ない吸血鬼はただ叫ぶ。

——後とはとどめを刺すだけだ。

「いいだろう私を殺すがいい!!　しかし努々忘れるな。私は人間ではないが、君が1人の命を奪うことには変わりない!!　めでたく人殺しの仲間入りだ!!」

命を奪うことで君の心は縛られて、殺すことで君のその手は血濡られて、殺した罪で君の魂は穢れるだろう!!

君は決して——私の呪縛から逃れられない」

カリバーンとデュランダルを新たに1本ずつ投影し、吸血鬼の頭と心臓に突き刺した。

シロウと呼ばれた少年はそのまま一足で後ろへ跳び退く。

『君は決して——私の呪縛から逃れられない。そう、決して!!
ハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!!!!!』

「——————
ブローケン・ファンタズム
壊れる幻想」

魔力の暴発で吸血鬼は四散し、聖なる魔力に汚染された肉体は二度と再生しなかった。



――――数日後

群青色の海が、港が見える。港から続くなだらかな斜面に沿って建物が建てられており、ヨーロッパの港町のように見える。だが実際は違う。ここは「夢の国」「魔法の国」「新世界」と呼ばれる場所。魔法が満ちた世界、「魔法世界」ムンドウス・マギクス。

その町の小高い広場、塀の上。そこに腰を下ろして港を眺める赤髪の少年がいた。

いや、彼は何も見てはいない。その目に何も映していない。心ここに在らず、彼はただ虚空に視線を送っていた。

「つたく、いつまで腑抜けてんだテメエは」

広場の入口から大男が歩いてきた。

長身で大柄、筋肉質な褐色の体を持つ金髪の男。頭に赤色のバンダナを巻いている。

その正体は18年前の大戦で魔法世界を救った英雄「紅き翼」アラルブラの1人。

最強の傭兵剣士、「千の刃の男」ジャック・ラカン。
今は―――広場で黄昏れている少年の師をしている。

「……………」

しかし少年は反応を返さない。

師は困ったように頭を掻きながら、しかし鋭い目で弟子を見やる。

「つハア~~~~、重傷だなこりゃ。……お前が言ったんだぜ、^{めえ}自分が殺るってな」

その問いで少年の瞳に、僅かに感情の光が灯る。

少年は復讐する為にこの世界へ来た。親友を殺した男を殺す為に。
そして————その目的は果たされた。

「……………わかってますよ。俺が決めた事です。その為に魔法^こ世界に來たんですから」

だがそれだけ。その問いに返答すれば少年は再び生氣を失う。

その様子を見てラカン^こは懷に手を入れて、用意した物を弟子に渡す。

「オラ」

「？」

少年は何か書かれた紙を手渡される。

「明日の午前9…34分……メガロメセンブリアのゲート通行許可証……………」

「確かイギリスの……ウェールズだったか？　そこに通じてるのは

メガロのゲートだったろ、確か」

「師匠？」

「まったく世話の焼ける弟子だぜオメーは。師匠の手を煩わせんじやねえよ。」

今のテメエに必要なのは休養だ。生まれた世界ばしょに帰って、魔法世界こでの

事は一旦忘れろ。気分転換ってやつだ。

チケット料金の利子は付けねえ。士郎——いつか必ず返しに
来い」

そうして少年は新世界を後にして、旧世界へと帰還した。

マイナス

—1話 麻帆良編 そこは運命が始まる場所

弟子がゲートを通ったのを確認して、ラカンがゲートポートから出て行った。

「これで満足か？」

ラカンがそう言うのと、彼の後ろにスーツ姿の金髪美女が姿を現す。

「ドネット」

本国——メガロメセンブリアの魔法使いであり、メルディアナ魔法学校校長の「魔法使いの従者」ミニストラ・マギ。ドネット・マクギネス。

「それは貴方が決めることでしょう？ 私には貴方の相談に乗って意見を述べたまですよ。」

でも意外ね。貴方なら力づくでなんとかしてしまいたいそうだけど」

ドネットは腕を組んだままラカンに話しかける。

「ああ。オレ様なら1発ブン殴って喝を入れてやるところなんだが……今のアイツじゃそれだけでおっ死んじまいそんな気がしてよ」

「私も彼がこんな所で抜け殻になるのは忍びないわ。近衛詠春の養子^{すこ}でジャック・ラカンの弟子……インフイニトウス・グラディウス「無限の剣」の近衛士郎。彼は間違いなく大成する」

「あいつはメガロにゃ付かねーぞ？」

「勘違いしないで。私はマスターの意向に従っているだけよ」

2人は不敵に睨み合う。先に視線を外したのはドネットだった。

「そうそう……彼の不法入国記録の末梢と正式な入国記録の偽造、出国申請、チケットの手配、とても大変だったわ。貸し1つにしておいてあげる」

目を瞑ってそう言うのと、ラカンは一ヤツと笑って応えた。

「何だそんなことかよ。だったら今夜にでも返すぜ？」

「結構よ、貴方のお酒好きと女好きは知ってる。飲みにも行って潰されちゃ堪らないわ。それじゃあまた会いましょう、千の刃」

そう言い残して彼女は颯爽とその場を去って行った。

（――さて……あの子の心は息を吹き返すかしら）

赤い髪の少年を思っ、ドネットは魔力充ちる空を見上げた。

・ ・ ・ ・ ・

ウェールズからは逃げるように去った。

誰にも気づかれぬように、会わぬように、静かに。

ゲートポートで換金しておいたポンドでチケットを買い飛行機に乗り込む。そして。

「……………着いた」

士郎は久しぶりに――5年ぶりに麻帆良を訪れた。

「……………抜かった」

士郎が麻帆良に着いた頃にはすっかり夜も更けていた。綺麗な満月が夜空で光る。

そして忘れてはならないのは、麻帆良は学園都市……「学校」ということである。

学校関係者用以外の宿泊施設などない。電車は士郎が乗って来たのが終電だ。

「しょうがない、今日は野宿か」

瞬動で走れば夜中のうちに近隣の都市に行くこともできるが、それ
は何となく億劫で野宿を選択する。魔法世界ではしょっちゅうだっ
たので苦ではない。だが都市部で野宿しては怪しまれる。浮浪
者扱いは勘弁なので森で野宿することにした。

「まったく、気分だけで旅行なんてするモンじゃないな」

何処に行こうか考えた。そして士郎が最初に思いついた場所は、何
故か実家の京都ではなく……ここ麻帆良だった。

森の方へ向かうまで、ついでの夜の学園都市を観察しながら歩いて
いった。



《ぐあああああああ！！》

鬼が1体、また1体と、その白刃に斬り伏せられて還っていく。

「はっ——、は……………っ！」

《ガキのくせにいい腕しとんのう》

《しかし娘っ子1人相手にこんな大人数なんて気分悪いわ》

《仕方あらへんやろ、それが命令なんやさかい》

《嬢ちゃんホンマ堪忍な。しかしな、嬢ちゃんが素直にココ通してくれるんやったらワシらも手エ出さんで済むんやで？》

「くッ……………!!」

鬼の軍勢を遮るように立ち塞がる、たった1人の中学生。

愛刀・夕凧を構えて息を切らす彼女の名は、神鳴流剣士——桜咲刹那。

麻帆良学園の正体はメセンブリーナ連合傘下、関東魔法協会。

その組織に恨みを持つ魔法使いや陰陽術師がこの街を襲おうとする。

（今夜はツイてないな…………おそらく偶然だろうが…今日はこのエリアに襲撃が集中している……………!）

ここは麻帆良の端と接する森。その中の開けた場所で、彼女は密かに冷や汗を流していた。

《気ィ抜いとる場合とちゃうで!》

「……………っ!!」

数体の鬼が刹那に迫り、先頭の1体が大剣を振り下ろす——！

————ボッ！！

《……あ？》

身に起こった現実には、鬼が呆けた声を出す。
振り下ろした腕が、何かに挟られて千切れ飛んだ。

《なっ———なんやコラァッ！？》

何が起こったか理解できないその鬼は絶叫し、刹那と他の鬼達は無意識に動きを停めた。
瞬間。片腕を失った鬼の視界に

————ズドオンン！！

突如乱入した人物に、全員が呆気にとられた。
赤い髪に黒いコート。黒塗りの弓を持つ男。一体彼は何者か。

先の轟音。彼は自分より遥かに大きな鬼の頭を鷲掴みにして、そのまま力任せに地面に叩きつけたのだ。鬼は今、ピクリとも動かない。

「こいつらって、全員敵？」

「……………え」

(……………あれ、この人……………?)

刹那はこの人物に、妙な既視感を抱いた。

「……………どうなんだ？」

「え？ あ、はい。一応全て、排除すべき敵ですが……………」

(って、ハッ！？ 私はこの得体の知れない男に何を無防備に……………!!!!)

「ってことは、だ。ここにいる化け物全員、狩り尽くしても構わないんだな？」

「…………………………は？」

刹那はただ、呆然とするしかなかった。

《————ナメるんやないでええええ!!——》

先ほどやられた鬼が起き上がって——残った腕で拳を握って振りかぶった。

刹那が思わず声をあげる。

「危な……っ!!」

結果を言えば、その心配は杞憂だった。

《……な………っ》

鬼の拳は、男の弓に阻まれた。弓の持つナックルガードが鬼の拳を防ぎきる。

そして男はそのとき既に、受けとめた体勢のまま矢を番えて敵の眉間に狙いを定めた。

だが「それ」を矢だと思った者は、この場でその男以外にいなかっただろう。

彼が弓に番えていたモノはどう見ても——” 剣 ” だったのだから。

——ドッ!

放たれた剣は当然のように鬼の頭蓋を貫いた。

「弓道と違って弓術には接近戦用の技がある。それと同じだ——覚えておけ。」

「真の弓兵は、接近戦でも負けはしない」

男が弓を持っていたから、弓兵だと思ったから——鬼は無謀にも殴りかかった。

その鬼も刹那も、勘違いしていたのだ。「弓兵だから、接近戦には弱い」と。

ただ彼は——弓兵でもないのだが。

「フデアット 投影、開始」

男の左手に、身の丈を越えるほどの、巖のような鉛色の斧剣が現れる。

今まで様子を見ていた他の鬼達に、男は右手で手招きして言い放つ。

「——来いよ」

《∴は。よう言った兄ちゃん》

《ワシらをそこらへんの奴等と一緒にするんやないで？》

「投影、装填」

《オオオオオオオオオオオ——ツ！！！！》

「――――――――――是、射殺す百頭」
ナインライフズブレイドワークス



《命を奪うことで君の心は縛られて、殺すことで君のその手は血濡られて、殺した罪で君の魂は穢れるだろう！！》

あれ以来。自分の手が赤黒く見える。どす黒い血の色に。
あれ以来。鏡で自分を見るたびに、昏い昏い影が見える。殺した男の嗤う姿が。

《君は決して――――――私の呪縛から逃れられない》

だから怖くて仕方なかった。力を、魔法を、魔術を使うのが。
そんな力が俺の裡にあるということが。

“そもそも俺は――――――何で、魔法使いになりたかったんだっけ

”？

何処に向かえばいいのか分からなくなって。師匠に呆れられて。旧世界に帰って来て。

麻帆良に戻って、妙な気配がやって来て、厄介事だとわかっていても探さずにはいられなくて、見つけてみれば大量の化け物と、それに立ち向かう女の子の姿。

だというのに。ただ怖くて。

目の前で女の子が危ない目に遭っているというのに、助けることさえできやしない。

怖い。力を使うのが怖い。

呆然と立ち尽くしていた時、ふとその娘の顔が見えた。

「――せ――」

――――せつな。刹那。桜咲刹那。

瞬時に、無意識に――過去の記憶がフラッシュバックした。

義妹の木乃香が。幼馴染みの刹那が川で溺れた時の事。

実の肉親を失って。でも俺は独りぼっちで生きていて。
2人が川に流されて、姿が小さくなっていくのを見て――――

気がつけば、士郎の手には弓と劔^やが握られていた。

「……………!!」

怯えていたのは心だけ。迷っていたのは心だけ。
身体はたとえ1度だって答えを見失っていなかった。

『例えこの手が血に濡れようが、この魂が穢れようが。その果てに、
大切な誰かを。
大事な何かを守るならば――――』

……………戦える。これからも頑張れる。

士郎は弓に劔^やを番えた。



(……………すごい)

刹那の見つめる先には、何もなかった。何も無かったのだ。辺り一面を覆う程の数の鬼。それらの姿は何処にもなく、挟られた地面のみが残っている。

その、大地を削った男が——刹那の顔を覗き込んでいた。

「っ！！」

一足跳びで数メートル後退し、男に向かって剣呑な声色で話しかける。

「……………何故助けた。何者だ。貴様のような人間が学園にいるとは聞いていない」

出来るだけ鋭い”気”を込めて睨みつけるが、男は呑気な顔で頭を掻いて呟いた。

「ああ、やっぱりそうだ」

「……………？ 質問に——」

「デカくなったな。刹那」

男はそう言って破顔した。

「え……………」

（……………もしかして……………）

赤い髪。そして目の前の、この人懐っこい笑みは。

「……………し、ろう？」

8年ぶりの再会だった。

「ははっ、当たり。やっぱり気づいてなかったんだなー俺はすぐ分かったのに。」

それにしても、随分可愛くなった……………いや、美人になった」

（……………へ！？）

「い、いやそんなウチなんか……………そ、それに士郎かて背が伸びて格好良くなって……………ってウチなに言うてるん！？」

刹那は髪を振り乱し、顔を真っ赤にして混乱した。

『其処の男、貴様 何者だ？』

「「!？」」

木々の陰から誰かの声が聞こえた。

（誰だ？ 声が異様に高い。女——いや子供？）

「その声は——エヴァンジェリンさんっ!？」

闇から現れたのは。

月光を受けて輝く金の髪。その身に纏う漆黒の外套。

その容姿は——10歳程度の幼い少女だった。

「……で 刹那、いつまでイチャついているつもりだ？」

彼女はからかう様に刹那をチラッと半目で見た。

「いっ…!？ わ、私は別にイ、イチャついてなど………!!」

「『ああ、すっかり美人になった』『アナタもとても格好良くなつて……』

ああ吐き気がする。これのどこがイチャついてないというんだ？」

「うっ!？ うう………」

全く反論できず、刹那は耳まで真っ赤にしながら涙目で士郎を睨んだ。

(いや、なんでさ?)

「と、そんな事はどうでもいい。その男。貴様一体何者だ?」

エヴァンジェリンは殺気を込めて士郎を睨んだ。



エヴァンジェリンは森に、自分の近くに大量の”気配”がするのに気づいていた。

警備の魔法先生や魔法生徒が出張るだろうと静観していたが、何時まで経っても気配は消えない。

今日が満月——僅かに魔力が回復する日——ということもあり、業を煮やして自ら出向いてみれば。

圧倒的な力で鬼を屠る男。彼女はその人物が久しく見ない”本物”だと直感した。

（いや……それは色目で見過ぎか。だがいずれ……アイツは必ず
”本物”に届く）

だが男が何者かだけは確認しなければならない。
機を窺って、エヴァンジェリンは木の陰から声を発した。



「その男。貴様一体何者だ？」

エヴァンジェリンは殺気を込めて士郎を睨んだ。
だが士郎は、そんなエヴァを食い入る様に見つめていた。

—————士郎が生まれて初めて見た、最初の魔法使い。
彼女に瓜二つ————いや、間違いなく彼女本人だった。

（馬鹿な……アレはもう何年前だと……！？ 何で、あの時の
まま————）

ほんの数日前、士郎が殺した男が答えを持っていた————”吸

血鬼”。

（吸血鬼で、少女……………子供……………！？）

———ハイデイトウオーカー———真祖の吸血鬼、『童姿の闇の魔王』。

「……………『闇の………エヴァンジェル福音』……………！？」

「ほう？　よく気づいたな。いや誰かにでも聞いたか？　そう、私こそ悪の大魔法使い———『闇の福音』！！　ふふん、この偉大さが解るか？」

———ド……………ザッ！

「「！？」」

エヴァが誇らしげに名乗った直後、士郎は地面に膝をついて———土下座した。

「お願いします。俺を、貴女の従者にしてください」

この後　紆余曲折を経て、士郎は「従者候補その1」としてエヴァの家に居候することになる。



――――1996年12月24日。士郎11歳

金糸の髪を靡かせて、冬の街に降り立つ小さな魔法使い。
彼女が何か呟く毎に、光が奔って化け物が凍りつく。

『フン、他愛のない。数だけの雑魚が私の手間を取らせるな』

封印されているとはいえ、アイツは圧倒的だった。

「俺は、弱い自分が嫌いだった。大切な誰かを守れる力が欲しかった」

「だから。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの強さに、俺は憧れたんだ。

いつか彼女のように。いつか彼女に――並び立てるような存在になりたいと」

これが後に語られる、士郎が魔法使いを目指した理由だった。

衛宮士郎が麻帆良に帰還し、桜咲刹那と再会し、エヴァンジェリンと出会う。

現在、2001年9月。

運命が始まるその時まで——あと17ヶ月。

—1話 麻帆良編 そこは運命が始まる場所（後書き）

これで過去編シリーズは終了です。

しかし、過去編として小説：ストーリーが作れそうなエピソードがあと2つほどあるんですよねえ……。

1）魔法世界で士郎がとある事件に首を突っ込む話、アリアドネー過去編

2）エヴァが士郎を「従者候補その1」として引き取って（？）から、エヴァが士郎にデレるまでの話、麻帆良過去編？

作るのが面倒だったので書かなかったんですけど、いつか書いてみたいなあ。

疑問点、お気づきの矛盾点がありましたら感想までお寄せください。

それでは次回！

第0話 プロローグ（前書き）

全てはここから始まった！

ネギま！ 剣製の凱歌・新編——「第0話 プロローグ」。

——どうぞ！！

第0話 プロローグ

鉄を鍛つ、音が聞こえる。

其処は地獄。または煉獄。或いは魂を灼く錬鉄場。

瓦礫の隙間から覗く外の世界。
そこには、空を焼き天を焦がす、真っ赤な炎が燃えていた。

少年の視界には瓦礫と炎以外なものも見えない。何も、わからない。

——なんで？　なんで燃えてるんだ？　なにがあったんだ？
ここはどこだ？　なんでボクはこんなところに？
痛い。痛い。たすけて、だれか——……

瓦礫の下敷きになった身体が苦痛を訴える。

炎の熱が徐々に迫り、少年の恐怖を増幅させる。このまま炎が勢い
を増せば、自分も
燃えてしまうのではないか——

「……………大丈夫だよ、士郎……………」

その声に、8歳の少年——衛宮士郎は一瞬驚き、そして安堵する。
声の主は士郎の最愛の姉、衛宮イリヤスフィールの声だったから。

「大丈夫、わたしがちゃんと傍に居るから……………」

その声で、士郎は自分の左手に伝わる温もりに気づいた。
姿は見えない。だが士郎の左手は姉の手と繋がっていた。
おそらく瓦礫の向こうにいるのだろう。
イリヤはずっと、士郎の手を繋いでいてくれた。

「……うん、おねえちゃん………」

姉の言葉で緊張が解けたのか、少年はそのまま意識を手放した。



結論からいえば、その惨事の原因はテロだった。

衛宮一家は家族でアメリカを訪れていた。

士郎は一家がどんな理由で、何処を目的地とした来訪だったのかは知らない。まだ幼い士郎にそんな事は関係なく、ただただ異国の地への期待に胸を膨らませていた。

そして——地獄は生まれた。



士郎が意識を失ってから数時間後……。

（大丈夫、……大丈夫……。助けが来る。待ってればきつと来るはず……）

イリヤは自分にそう言い聞かせ、士郎の手を強く握る。

士郎の声がずいぶん前から聞こえないが、握る手の温かさから生きていると予想する。

——バキッ……

「えっ………？」

パラパラと、上から砂が降ってくる。

——ガゴッ……

（——そんな、だめ——）

瓦礫が、崩れる。

「しろ………！！」

士郎、と呼ぼうとするが、彼女の、姉イリヤの士郎声が弟に聞こえる事は、

————二度と、なかった。



誰かの声が聞こえた気がして。士郎は目を覚ました。

声が聞こえる。

「……………X…X……………X X X X X……………！————！！」

「……………X X ！？X X X X……………X X ！X X X———X X X ！！」

（だれかいるみたいだけど何を言ってるのかわからない。たぶん英語。アメリカだし）

そんなことを思っていたら、目の前から瓦礫がどけられ、数人の大

人たちが現れた。

大人たちは英語で何か言いながら、士郎を引き上げた。

（――助かった……）

あれから何時間経ったのか。

疲弊しきった心は、助かったことを喜ぶことさえしなかった。
そしてそれよりも重要なことが、士郎にはあったのだ。

「お……ねえ……」

炎で高温になった空気と煙を吸ったため、喉が焼けて声が出せない。
しかし士郎が話さずとも、救助隊員たちは士郎が埋まっていた辺りの瓦礫を更に除去し始めた。別の子供の手が見えていたから。

そして士郎は見てしまった

姉がいるはずの場所にあった、姉だったモノを。

（――え――）

ソレは――赤かった。
赤く、紅く、朱く、赫い。士郎が今まで見たこともない程に鮮やかな「血の色」。

力なく放り出された細い手足。

落ちた瓦礫に潰されて、腹から飛び出した内臓。

その時のものであろう、とてつもない量の出血。乾いた血溜まり。
美しい銀髪と、整った顔。

生前は愛らしかったであろう目は濁り、瞳孔が開いている。

誰の目にも、彼女――衛宮イリヤスフィールの死は明らかだった。

――それを。士郎は見てしまった。

「う、あ……ああ……あ………あああ!!」

――嘘だ。

（嘘だ……嘘だ………嘘だ………嘘だ………嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ……
……嘘だ!!!!）

[illegible]

其処は地獄。または煉獄。或いは魂を灼く鍊鉄場――

その日は、今思ひ出しても腹が立つくらいに。忌々しいほどに。

「――綺麗な夕焼けだったな」

レンガ造りの街並みと、それを見下ろす世界樹が朱に染まる。
麻帆良の空が赤く焼けるのを眺めながら、士郎はそう独りごちた。

第0話 プロローグ（後書き）

〈補足・解説〉

…麻帆良の空が赤く焼けるのを眺めながら、士郎はそう独りごちた。
麻帆良商店街からの買い物帰り、ふと空を見上げて言った。
このあとエヴァの家に戻った時、ちょっとブルーな気分になって
いたのを見抜かれて慰められる。

それでは次回！

第1話 衛宮士郎の1日（前書き）

ようやく第1話です。長かった……………。

そして書いてて楽しかった。まさに改訂版、といった仕上がりになったのと思います。

それでは「第1話 衛宮士郎の1日」、どうぞ！

第1話 衛宮士郎の1日

時は2003年2月、その深夜。

夥しい数の黒い影が空を占めて大地を這う。

それらはみな一様に、とある場所を目指していた。

――――夜。それは魔が跋扈する刻。

古来より魔性の類は群れを成し、悪鬼羅刹・魑魅魍魎を人々は畏れた。

しかし長い年月は文明を進化させ、科学が発展し、いつしか人々は神秘を信じなくなった。

それに伴って神秘は力を失い、精霊・妖精・妖怪・鬼・悪魔など、人ならざる存在は自分達の世界へ姿を消した。

だがそれはあくまで”普通の”場所の話。

日本有数の霊地―――「聖地」であるこの麻帆良は、現代においても年に数回、鬼や悪魔が現れる。

世界有数の学園都市・麻帆良学園。その正体は「関東魔法協会」。

20年前に”新世界”で起きた大戦時、こちらの世界「旧世界」でもその影響が現れた。

日本は以前から対立のあった「関東魔法協会」と「関西呪術協会」に勢力が二分した。

戦争が終結し和平が成った今日であるも、当時のしこりは水面下で未だ消えず、敵国側の魔法使いや陰陽術師達の末端は暴走し、今でも鬼や悪魔かれらを召喚して送り込んでくる。

そしてそんな輩からこの地を護る役目を担うのが、
”夜の警備員”—————「魔法先生」と「魔法生徒」である。

今日、麻帆良の夜を護る者の中には…………。

紅いジャケットを纏って赤い髪を靡かせる弓兵アーチャーがいた。

第1話 衛宮士郎の1日

射る。射る。射る。
射る射る射る射る。

矢を番え、狙って放つ。ただそれだけ。ただそれを繰り返し返すだけであらゆる悪魔が撃ち落とされる。

かならずあたる
正射必中の高速連射。射程距離は4 km以上。その脅威は言わずとも伝わるだろう。

悪魔は今日も目標に近づくことすら出来ずに還っていった。

「ふう……」

麻帆良で一番高い時計塔、その天辺で士郎は一息ついた。

(見たカンジ、もうこっちに向かつて来る影はない)

魔力を通して千里眼で遙か遠くを凝視して数秒、士郎は呟いた。

「……終わった、かな？」

「そのようだね」

声の主は黒髪に黒い肌を持つ長身の女性——いや、少女。

麻帆良学園本校女子中等部2-A、龍宮真名。

「仕事道具」が入ったギターケースを抱え、隣りの建物から跳躍して士郎の隣に降り立った。

「まだ確定じゃないだろ。ていうか持ち場を離れていいのか？ 刹
那はどうしたんだ」

「あの程度の敵なら1人で問題ない、もう終わる」

「終わってないのに来るな！ てか仲間を敵地に置いて来るな！！」
「だってしょうがないだろう？」

真名はスルツと士郎の腕に自らの腕を絡めた。

「この時間に士郎さんに会うことなんて、滅多にないんだから」

真名も士郎も遠距離支援に適した能力の持ち主だ。故にこの2人が
同じ時に警備にあたるという事はほとんどない。今回は弐集院の急
用の為にたまたま士郎がシフトに入ったのだ。

真名は妖しい笑みを浮かべて流し目を送る。だが士郎には効果がな
かった。
ぼくねんじん

（俺なんかをからかって何が面白いんだか）

「昼間にしょっちゅう会ってるだろ？」

「ムードっていうものがあるんだよ」

真名が更に士郎に密着し、その肩に頭を乗せて

「――――龍宮っ!!」
「ん？」

下の方を見ると、野太刀を持った少女――刹那が顔を真っ赤にして、建物の屋根からふたりを見上げていた。

「……………何だ、もう来たのか」
「そっそそ…! そんな事よりたっ龍宮……………!!」

狼狽しているわりに、刹那は視線を逸らすこともせず2人をじっと凝視していた。
ちなみに今の士郎と真名は逢瀬を重ねる男女のようで、密着した2人の姿に刹那は顔から火が出そうだった。

「……………♪」

真名に天啓が降って来た。
悪戯めいた笑みで刹那に顔を向け、士郎にバレないように口パクで話しかける。

「? 真名……………?」

「……………眠い」

目覚まし時計を止めて目を開ける。

陽光が窓から射すなか、重い瞼をこすりながらベッドから這い出た。

着替えて1階へ下りると、キッチンから包丁の音がする。

「おはよ茶々丸」

「おはようございます士郎さん」

緑色の髪を持つ女性型ガイノイド（ロボット）、絡繰茶々丸。

”アイツ”の従者の1人で、そういう意味では俺の先輩に当たる。

そもそも女性型ガイノイドという呼び方は間違いで、ガイノイドという名称自体が女性型を表すらしい……とかどうでもいいや。

洗面所で顔を洗ってうがいをして、それからまたキッチンへ。

「茶々丸、何か手伝うコトあるか？」

「いえ、もう朝食の支度は終わりますので」

普段なら俺も手伝っているのだが、昨夜のように仕事が入ると次の朝は早起きできないことが多いため、今では朝の準備は茶々丸1人に任せている。

「もう時間ですね。士郎さん、マスターを起こして来てくださいませんか？」

「ああわかった」

朝に弱い、この家の家主にして我らがマスターを起こしに階段を上がる。

・ ・ ・ ・ ・

どうせ起きていないだろうと思ってノックせずにドアを開ける。目当ての人物はやはり、布団を頭まで被って日光を避けていた。

「エヴァ起きろ、朝だぞ？」

「……………」

へんじがない。ただのきゅうけつきのようだ。

「エーヴァー、あーさーだーぞー!？」

「……………」

「……………」

……この少女が布団を剥がされても起きないほど寝惚ける日。それは必ず士郎が夜の警備に出た日の翌日だ。

——待っていてくれるのだいつも。次の朝が辛いのが分かっている、士郎が家に帰って来るまで夜更かしをして。

それが分かっているのです。士郎も乱暴な起こし方が出来ない。……それを抜きにしてもこの男はエヴァンジェリンに甘いのだが。

「……………しょうがない、着替えは後だな。エヴァ、洗面台まで行くぞ」

「ん……………」

結局こんな日は士郎にだっこされて1階まで下りてゆく。

まだ目の開かないエヴァは、士郎の胸に気持ち良さそうに凭れかかって揺られていた。

・ ・ ・ ・ ・

「マスター、もう出発のお時間です。急がないと登校ラッシュに遭遇してしまいます。」

……あ・マスター、お弁当を忘れています」

「ハンカチとティッシュはポケットに入ってるか？ 筆記用具を忘れたなんてオチはなしだぞ？」

「お前らは私の保護者か！」

似たようなものである。

バッチリ目が覚め、ようやく本調子になったエヴァの怒声がリビングに響いた。

「じゃあ、行ったらっしやい」

「ああ、行ってくる」

「行って来ます士郎さん」

2人が出て行ったのを確認して、士郎も出かける準備を始めた。



鍵を開けて裏口から入る。荷物を置いてエプロンを着て手を洗う。食材の仕込みと下拵えを終えてカウンターとテーブル、床を掃除する。

最後に表口の鍵を開けて「準備中」の札を「営業中」に裏返し、今日のおススメを書いた看板を表に出す。

「喫茶店アルトリア」。

士郎が1人で経営する、一度に20人程度が入れるそう大きくない店だ。ありがたいことに、時間帯によっては忙しくさせてもらっている。

午前10時を以て、本日の営業を開始する。

（さて、今日の最初の客はどんな人かな？）

———カランコローン！

（はやっ。）

「いらっしやいませ、何名様で………ホントに早いなオイ」

「ふおふおふお、見ての通り1人じゃ。抹茶と水羊羹を頼むわい」

本日最初の客はこの学園都市の最高責任者、麻帆良学園学園長・近衛近右衛門。

仕事と部下から逃げて来店する、サボりの常連であった。

・ ・ ・

・ ・ ・

「ズズ…………おおそうじゃ、近々ウェールズからお主の知っておる顔が来るぞ」

「？ 誰だ？ それに何で？」

羊羹を平らげた近右衛門は残りのお茶を啜っている。

「うむ、修行のためじゃ。昨年メルディアナを卒業した子の修行先が日本でな、ウチに呼ぶことにした。卒業後すぐ日本語の勉強を始めたんじゃが、何と3週間でマスターしてしもうたらしい。ふおお、将来有望な子は大歓迎じゃ」

「でも卒業式は夏だろ？ 何でわざわざ年越して2月に来るんだ」

「あれじゃ、前例がない修行内容じゃったから準備や手続きに思ってたより時間を喰ってしもうたんじゃよ。交渉やら根回しやら裏取りひk…………げふんげふん」

…………土郎は聞かなかったことにした。

「…………で？ その俺の知り合いつて誰だよ？」

「ふおおおおお♪ それは会ってのお楽しみじゃ！」

———カランコローン。

「いらっしやいま……あ、お久しぶりですタカミチさん！」

やって来たのは麻帆良学園女子中等部の非常勤講師、タカミチ・T・高畑だった。

担任クラスを持っているのに非常勤。表向きは出張が多いからという事になっているが——実は紛争地域に出向くなどして活動する、魔法使いのNGO団体で活動している為だった。

「久しぶりだね士郎君。いや、この店も本当に久しぶりだ」

タカミチはそう言って眼鏡の奥の目を細めた。

「いつ帰って来たんですか？」

「ついさっきだよ。朝食を抜いたから何か軽く食べたいと思ってね」

「ひよ。御苦労じゃったのタカミチ」

———がしっ！

「ふおっ!?!」

タカミチが近右衛門の肩を掴んだ。服に皺ができるほど強い力で。

「タ、タカミチっ!？」

「でもそれも無理みたいだ……食事は昼までお預けだね。ところでですね学園長。僕は久しぶりにこの店に来ましたが……あなたはそうでもないみたいですね？」

「ええ、最近じゃ平日は毎日のように来てますよ。勿論仕事時間中に」

「し、士郎っ!!」

「僕が出張に行く前は週に3日だったのに……はあ。
では帰りましょうか学園長。きつとしずな先生が笑顔で出迎えてくれますよ」

タカミチは疲れたように溜め息を吐きながら近右衛門を引き摺っていった。

———カランコローン

ドアが閉まる際、近右衛門は確かに見た。

笑っていた士郎の口が「次来る時はツケを払え」と言っていたのを。

「ひよ———……。」

暫くアルトリアには行かないと心に決めた近右衛門だった。



「ほらほら士郎さん早く座って！」
「はいはい」

時刻は変わり夕方。学園都市は放課後の喧騒に包まれていた。
しかし喫茶店アルトリア、ただいま身内による貸し切りです。

紅茶のポットと人数分のカップ、ショートケーキをテーブルに置いて士郎も座る。

それ以外で席についているのは木乃香と明日菜。

「じゃあ早速、『このかと桜咲さんを仲直りさせる為の作戦会議』
を始めるわよ！」

・ ・ ・ ・ ・

議論（？）が進むにつれ、士郎は内心で四苦八苦していた。

「いやな、刹那はお前のこと嫌ってるわけじゃないんだよ」

「……………ホンマに？」

木乃香は顔を俯かせたまま士郎に目を向ける。

（むう…本当の事情を話せないのが口惜しい…）

「うーん、何て言ったらいいか……………家柄を気にしてるっていうのもあるかな…？」

自分なんかがお前の友達に、なんて考えてる節もあるし」

「そっか、そーいえばこのかってお嬢様だもんね」

「そんなん気にせんでえーのに……………」

「あとは……………昔、川で溺れた事があったろ」

『助けられなくてごめん、このちゃん。ウチ……………もっと強おなる』

あれから……………あの時からだ。刹那が”神鳴流”の修行に明け暮れるようになったのは。

「……………うん。よう覚えとる」

『え？ そんなんええよ、一緒に遊んでくれるだけで』

「そんなん………本当にどうでもええのに。ウチは——」
「……………木乃香」

——ガタンッ！

「よく分かったわ！　桜咲さんはよくわかんないけどどーでもいいことで悩んじゃってこのかと仲良く出来ないのね!!」

明日菜が勢いよく立ち上がってテーブルをバン！と叩いた。

（「よく分かった」のに「よくわかんない」ってどーいうこったオイ。……それに刹那にとっては「どうでもいい」ことじゃ……ないんだけどな）

明日菜が発起して話し合いが続くも結局、良い案が浮かぶことはなく。

「積極的に話しかけてスキンシップを図る」ような作戦に落ち着いたのだった。

（これだけで上手くいくとは思えないけど……俺も刹那にそれとなく言ってみようか）

「紅茶とケーキ美味しかった！　ありがとねー」

「ほななーシロウ！」

自分に手を振って帰る妹とその親友を見送って、士郎はふと思いついた。

「今日はこのまま閉めようかな。たまには早く帰るのもいいだろ」

（お土産にお菓子なんか持って帰るといいかもしれない。あの素直じゃない吸血姫が表に出さない喜色を浮かべるのが目に浮かぶ。よし！そうしよう。）

そんなことを考えながら看板を片付けようとしたら。

——ドドドドドドドドドドドド………！！

「……………うん？」

こちらに向かって走って来る人影が見える。

スーツ姿、黒い短髪、黒い肌、眼鏡、タラコ唇の男性。

麻帆良学園の教師にして魔法使い——魔法先生ガンドルフィーニ。

（い、嫌な予感……………）

彼は士郎の目前で「キキイイ——！」とマンガのようなブレーキ音を出して停止した。

「すまない士郎君！ 実は娘が急に熱を出してしまって——申し訳ないが今日の”警備”のシフト、代わってくれないだろうか！？」

この学園では堅物——頭が固いことで生徒に有名な彼なら、本来は「仕事だから仕方ない」と言っただけで娘の付き添いを諦めるだろう。しかし士郎はよく他人とシフトを代わってくれるため、今では魔法先生はちよつとしたことで士郎に交代を頼んだりするようになってしまった。

士郎は麻帆良ではちよつとした有名人で、「誠意を持って頼めば力になってくれる良い人」と評判であった。

（は、はは……）

士郎は乾いた笑いが止まらなかった。

「風邪、流行ってるんですかね……」

「ん？ ああ、最近初等部や中等部では熱を出して休む生徒が多いと聞いている。そういえば式集院先生の娘さんも先日熱を出したと

か……………士郎君？」

そう。だから昨日、士郎は弐集院の代わりに警備の仕事に出た。

弐集院に……………さっきのガンドルフィーニと全く同じ台詞を吐かれて。

「……………いいですよ。学園長^{じいちゃん}には俺から話しておきますから……………」

「そうか、いや助かった！　じゃあ私はもう行かせてもらうよ、本当にありがとう！！」

走り去っていく彼の姿を見る士郎の背中では、日が落ちる空のように哀愁が漂っていた。



「ただいまー」

今日は深夜1時頃に帰って来れた。襲撃は年に数回の頻度で起きる。昨日の今日ということで今夜は何事もなく終わった。

「うむ、おかえり」

「お帰りなさいませ士郎さん」

エヴァはソファに寝転がって本から視線を逸らさずに、茶々丸は薄く笑って士郎を出迎えた。

「別に待っててくれなくてもいいんだぞ？」

ソファの後ろからエヴァに話しかける。

日付はとっくに変わっている、出迎えてくれるのは嬉しいが、その為には彼女が寝不足になるのは申し訳ない。

「別にお前を待っていたわけじゃない。ただ紅茶を飲みながら読書してただけだ」

「ええ。時折り時計へ視線を向けてその都度溜め息を吐きながら読書されておりました」

「よ、余計なことを言うなボケロボ！！」

（あれ、なんかエヴァの顔が赤くなった。　どうしたんだ？）

「それに私の記憶によればその本、既に何度も熟読されているハズですが。　ああ、そういえばその本を開く前に『ヒマ潰しには丁度いいだろう』と仰っていましたね。

……マスター、お暇だったのですか？　ならばお休みになればよろしかったのでは」

「キサマ確信犯だろうその発言は！！　ええい巻いてやる！　巻い

てやるううう!!」

耳まで真っ赤にしたエヴァがネジ——茶々丸の魔力供給用のネジ。巻き過ぎるとキモチ良過ぎて茶々丸が「感じて」しまうため、お仕置き代わりに使用される——を片手にソファから立ち上がる。

しかし。茶々丸はエヴァの一步先を行っていた。

「——き…貴様……!!」

茶々丸は士郎の後ろに避難していた。背中にぴつとりとくつついてエヴァを見ている。まさにロー・アイアスッ!!（一部の人間限定）頭に上った血が僅かに下がり、そこでエヴァはようやく、士郎がじっと自分を見ていることに気づく。

「……………あ、う……………ち、違うぞ。私は別に、お前を待ってなんか……………」

士郎は狼狽するエヴァの前まで歩み寄り、彼女の頭をくしゃりと撫でて破顔した。

「ありがとな、エヴァ」

「……………」

士郎からは見えなかったが、エヴァは口をへの字に曲げて——気持ち良さそうに目を細めていた。

「今日はもう寝るよ。明日の朝にでもシャワー浴びる。おやすみ2人とも」

「おやすみなさい」

「……………おやすみ」

こうして士郎の1日は終わった。

これが日常。こんな日がずっと続けばいいと———そう思っていた。

———フェイト運命が動き出す。



眼鏡をかけた赤い髪の少年が、大荷物を負って麻帆良の電車に乗っていた。

203

..... — !

「わわわ何コレ!？」

スゴイ人!

《学園生徒の皆さん　こちらは生活指導委員会です　今週は遅刻者ゼロ週間　始業ベルまで10分を切りました　急ぎましょう》

「え、もうそんな時間！？　僕も急がなきゃ、初日から遅れたらマズイよーって、アレ？　あの人………」

少年の視線の先で、2人の少女が走っていた。

・ ・ ・ ・

「でもさ、学園長の孫娘のアンタがなんで新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないのよ？」

「スマンスマン♪」

橙色のツインテールとオッドアイの持ち主、神楽坂明日菜と。

ツヤのあるストレートロングの黒髪を持つ京都生まれのお嬢様、近衛木乃香。

彼女達は今日も今日とて遅刻ギリギリで登校する。

「にしてもアスナ足早いなー、私なんてローラーブレードコレなのに」「悪かったわね体力バカで。」

——瞬間。風が吹いて明日菜の髪とマフラーが揺れた。

「ん」

気づくと明日菜の隣には、彼女に併行して走る赤い髪の子供がいた。彼は直後、初対面の人間に言うには無礼に過ぎる言葉を吐いた。

「あの——……あなた、失恋の相が出てますよ」

第1話 衛宮士郎の1日（後書き）

（補足・解説）

…紅いジャケットを纏って赤い髪を靡かせる弓兵^{アーチャー}がいた。

アーティファクトに登録されている服装、赤い革のジャケットに黒いブーツ。つまりAF「顔のない英雄」を装備中。ただし登録数ゼロなのでただのグローブ状態ですが。

…真名が更に士郎に密着し、その肩に頭を乗せて

エヴァや刹那には無理ですが、（現在の）士郎と真名は身長が同じなので可能です。このシチュエーションは真名の特権ですね。

——いや、おんぶや抱っこされた時なら可能か……！！

…重い臉をこすりながらベッドから這い出た。

Fate原作の士郎と違い、ウチの士郎は朝に弱い。

…笑っていた士郎の口が「次来る時はツケを払え」と言っていたのを。

…暫くアルトリアには行かないと心に決めた近右衛門だった。

次回来店時にツケを払ってもらえればよし。ツケを払うのが嫌で来店しなくてもよし、真面目に仕事しろ。という、どちらに転んでも士郎の望むとおりにするという謀略（近右衛門はアルトリア以外にはサボリに行かない）。

見事に士郎の策に嵌まった近右衛門であった。

…しかし士郎はよく他人とシフトを代わってくれるため、

明石「すまない、今日は娘と外食することになってしまっただけね」

刀子「今夜、彼氏とデートなんです♪」
士郎「NOとは言えない日本人」

..しかし。茶々丸はエヴァの一步先を行っていた。
彼女はきつと「危険物取扱者 吸血種」の資格を取得済み（ウソ）。

..「あの―――……あなた、失恋の相が出てますよ」

K C 1 巻のネギは嫌いです。余計なお世話なんじゃボケエ！ 1
巻読んだときにネギま！読むの止めようと思った（実際そこでネギま！読むのやめた）くらい嫌いです。

でも今のネギは好きですね。応援してるぜ！ ファイト！！

さあ、はたして次の更新はいつになるのか！？
なにぶん不定期更新ですからね……気長に待って頂ければありがたいです。

それでは次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1533w/>

ネギま！剣製の凱歌・新編

2011年9月29日10時09分発行